

季刊 史料と伊能図

伊能忠敬

研究

一九九八年春季 第一五号



伊能忠敬研究会

表紙図解説 グリニッジ国立海事博物館の地図裏の記録

九五年十二月、グリニッジを訪れ伊能小図を見せていただいたとき、一番最初に見せられた地図入手の記録で、地図の裏側に張ってある。「測量艦『アクテオン』と『ドーブ』から納められたもので、日本政府（徳川幕府）から公使のオールコックに贈られた」と記されている。

ひょっとして、日本から返還請求ができないかな、などと考えていたものだから、あてが外れたことを記憶している。日本側の記録でも与えたとあり、貸したとは書いてないから、どうも日本に戻ってくる見込みは無さそうである。

国立海事博物館（National Maritime Museum）は、ロンドン市内のテムズ河の下流にある。隣りは有名なダートマス海軍兵学校とグリニッジ天文台である。近くにはインドから紅茶を運んだカティサーク号が係留されている。カティサークはウイスキーの名前になっている帆船だ。見学ができる。海事博物館のなかは英国海軍と海軍の歴史を語る史料がいっぱいで、ネルソン提督の遺品などがある。ロンドンの中心からは鉄道でもいけるが、ロンドン橋の近くから船で下るのが風情がある。近くには有名なバブなどもあり、一日の観光コースでもある。

（題字は忠敬の筆跡）

（渡辺）

目次

（表紙写真解説） 目次

巻頭エッセイ

伊能忠敬の足跡

トピックス

国立国会図書館新収の大図模写本について

「伊能忠敬展」の舞台裏

富岡美術館展を終えて

都民カレッジ「伊能忠敬再発見」を受講して

史料紹介

伊能家文書紹介 八

●お信さん（つづき）

●南海鵬右衛門

連載・第六次測量日記 八

地域史料

駿河国須走村米山家日記

研究ノート

歴史のなかの伊能忠敬

●伊能図の衝撃

伊能忠敬と数学

入会案内・編集後記

竹内 誠 1

鈴木 純子 2

渡辺 一郎 5

浅井 京子 6

岡山 宣孝 7

安藤由紀子 10

伊能 陽子 15

佐久間達夫 19

小林 正雄 23

芳賀 啓 26

水野 滋 30

33

（裏表紙） 英文目次

伊能忠敬の足跡

竹内 誠

歴史研究者が組織する全国学会が、日本にはいくつかある。私が四十余年間会員である地方史研究協議会も、その一つである。同会の昨年度大会は富山市で開催された。共通論題は「情報と物流―越中・富山の地域像―」。富山の売薬商人の全国的規模での活動に興味をもって私は、期待をもってこの大会に参加した。

ところがである。楠瀬勝富山大学名誉教授の記念講演「江戸後期における在村の学問と技術」をお聞きして、私のさやかな興味の満足どころか、もっと大きな思わぬ収穫を得ることができた。お話のなかに、伊能忠敬が登場したのである。「瓢箪から駒」とはこのことである。

実は、その頃私は、本年四月から江戸東京博物館で開催予定の「伊能忠敬展」準備のため、担当の学芸員からいろいろ相談をうけており、展示をより豊かにするために、伊能図ばかりでなく、伊能測量隊の各地域における交流の実態などの展示をも構想していた。

楠瀬先生の講演は、越中の測量家・石黒信由以下四代にわたる業績と、その裏づけとなる高樹文庫資料に関するものであった。そのなかに、「一八〇三（享和三）年八月三日、北陸路測量中の伊能忠敬は放生津に止宿、石黒信由はこれを訪ねて天体観測を見学。翌四日、忠敬の測量に四方まで同道、指導をうけた。その際、信由は忠敬持参の穹窿羅鍼（佐原市伊能忠敬記念館に現蔵）を写生、のちに強盗式磁石台を考案した」という話があり、思わず心中快哉を叫んだ。

伊能研究の専門家にとっては周知のことであろうが、私にとっては大変新鮮な発見であった。伊能が各地に残した足跡の大きさを実感したが、これはそのほんの一例といえよう。早速、講演後の先生に、江戸東京博物館で開催の伊能忠敬展へ関係資料出陳の協力方をお願いし、ご快諾いただいた。

生涯学習時代の今日、その拠点の一つである江戸東京博物館で、生涯学習の鑑とも賞すべき伊能忠敬の実像にせまる展覧会を催すことの意義は大きい。一三七年ぶりにイギリスから里帰りする伊能小図の展示をはじめ、伊能忠敬研究会の皆さんに多大のご協力をいただいた伊能忠敬展は、必ず成功するものと確信している。

本誌『伊能忠敬研究』は、毎号非常に充実した内容の論稿満載である。特に「四千万歩の男」の研究にふさわしく、まさに足で書いた貴重な成果が多い。なかでも本誌に、忠敬が各地の人びとと出会った交流の姿を紹介してくれる「伊能測量の地域史料」欄があることを、私は格別嬉しく思っている。

（たけうち まこと・江戸東京博物館館長）

国立国会図書館新収の大図模写本について

鈴木 純子

昨年、気象庁の図書館から国立国会図書館に寄贈された「伊能図」の大図模写本四三枚（以下当図と表記）については、本誌第十三号に渡辺一郎氏の報告があるが、多少の補足もかねてその概要を紹介する。なお、当図を含むこのたびの寄贈資料については、保存対策、整理等のために現在はまだ一般に利用できる態勢となっていないが、公開以前に次の二つの展示会で対象地域の異なる各四面ずつが展示される予定となっている。

●「国立国会図書館開館五十周年記念 貴重書展」(国立国会図書館)

六月九日(火)～二〇日(日)

●「伊能忠敬展」(江戸東京博物館)のうち

六月十六日(火)～二二日(日)

一 本図の概要

文政四年(一八二二)上呈の『大日本沿海輿地全図』大図二二四枚のうち四三枚、関東地方を中心に中部地方東部から東北地方南部にかけての地域を連続的にカバーする。

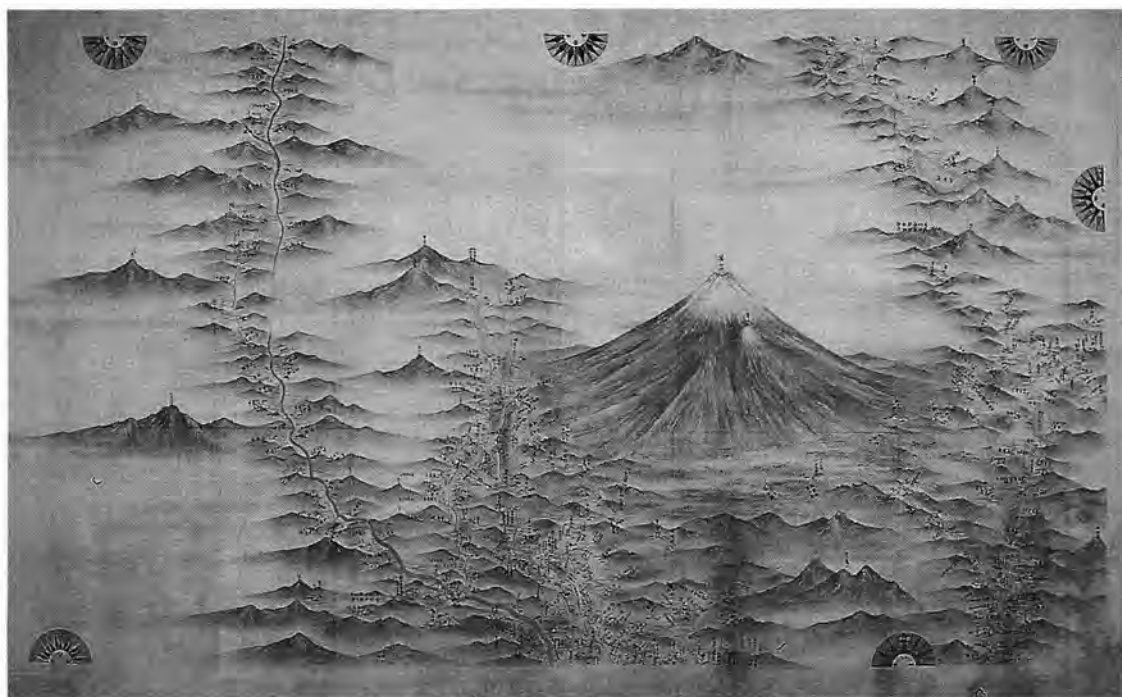
楮紙を貼りつなぎ、雲母引きの裏打ちを施した料紙に描かれている。縦長、横長の図が混在するが、紙の幅(短辺)は一二四センチ(測定誤差も含むミリ単位の差あり、第九〇・九三のみ一一七・五センチ)とほぼ一定し、長辺には一二四～二一センチと図ごとの違いがある。各図とも周囲には余白があり、図の描かれている部分の大きさは一定

していない。山地の緑色が卓越する彩色図である。針穴はない。一見して伊能図、大図といえる。タイトルにかかわる記載事項としては、各図裏面肩の部分の「関八州 第〇〇 国名(複数併記のものあり)」という墨書と、一枚だけ残っていた巻帙に書外題「実測輿地図 関八州」がある(一部の図には表面にも「第〇〇 国名」の記載がある)。描法、記載事項、縮尺等から大図であることを、地図各号の収図域を最終版大図の一覧図と照合することによって最終版のものであることを確認した。気象庁旧蔵という点は、模写の事情などを探り、本図の位置づけを知るための有力な手がかりを提供するものである。

二 描法・記載事項・縮尺・図郭など

量地筋の折れ線、駅町の○、緯度測地の☆を朱で描く。図によってやや精粗があるものの描画は全般に丁寧で、地名は楷書体で整然と記されている。○と☆は印判ではなく手書きのため形の崩れたものもまじり、量地筋についても折れ線のシャープさに欠ける部分がある。海・川・湖沼の青、砂浜・河原の黄色、樹木を配し山麓をばかした山地の緑、平地部分の淡褐色などいずれも伊能図の特色を示す。城や主要な寺社にはその名称、城主名、街道(測線)沿いに国郡界、村名、知行者名が記入されている。また、隣接図との接合の合印として図の周辺各所にコンパスローズが描かれている。しかし、模写にあたった絵師にはその意義が十分理解されていなかったのか隣図と色が違ったり位置がずれたりしているものもある。文化十二年以後の測量にかかる富士の裾野や伊豆七島などが含まれている。

縮尺については距離測定の起・結点の確認ができず、正確な算定ではないが、東西南北の辺がはっきりしている図(たとえば江戸を含む



伊能図第100 甲斐 駿河 (広報用写真)

(国立国会図書館提供)

「第九〇 武蔵 下總 相模」の収図域を現代図上に落とし、その辺長を比較すると三六〇〇〇分の一に非常に近い値となる。

図郭については一覽図*と照合して地図番号、紙の縦横方向、図域などの一致を確認した。この一覽図は国立公文書館内閣文庫所蔵の『輿地実測録』の付図「地図接成便覧」を活字化したものである。写真を利用して全図幅の接合状態も概観した。(＊保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』一九七四所載、本誌第十三号渡辺報告にも転載)

三 本図の来歴

当図が気象庁に伝えられてきた事情は気象庁の出自から説明できる。むしろそのことが本図のなりたちを推論し、判断するための有力な根拠だということは前記のとおりである。

細部は略すが、気象庁の前身である東京気象台は明治八年(一八七五)、内務省地理寮(のち地理局、以後特に必要のない限り地理局と記す)内に設置された。明治二〇年(一八八七)より中央気象台、昭和三年(一九五六)に気象庁となっている。気象庁は明治初期には地理局と同一の組織だったわけで、地理局旧蔵資料の一部が気象庁内に引き継がれてきたことはしかるべきなりゆきの一つといえる。実際、今回の寄贈資料中にも地理局測量課の印記のあるものや地理局作成図の手書き原図と思しきものなどが混在する。本図には印記はない。これについてはあとでふれる。

次に地理局と「伊能図」のかかわりを見よう。「伊能図」が資料としてさかんに利用されたのは維新後、近代的測量による地図が整備される以前、すなわち明治初期のことであり、この時期がさしあたっての調査の対象である。内務省年報は明治八年以後のものしかなく、以

後数年の記事中には「伊能図」関係のものは見あたらない。「伊能忠敬事蹟集纂」(東京大学史料編纂所蔵)によれば、佐原の伊能家所蔵の副本は、明治五年(一八七二)十一月に工部省測量司が謄写のため借り受け、その後政府に献納された(献納の時期不詳、七年八月に賞与金)。そのほか館澤彦「日本測量野史稿」(師橋辰夫「三拾三年之夢 日本測量野史稿」地図九一、一九七二)明治六年二月の項には、伊能源六(忠敬の曾孫)から「日本大図」を借り、絵画者を募って謄写させたという記事、また河田熊「本邦地図考」(三)「史学雑誌」六二七、一八九五)には、地誌課(こは両者合わない)が伊能家副本について謄写のため借用を請い、結果献納となったとの記事がある。河田はさらに付言として「大図ハ曾テ地誌課ニ託シ其管内一部ヲ謄写スルモノニ、三県アリ、(以下略)」としており、大図の謄写については控えめな表現をしている。館、河田ともに測量司、地理局に籍をおいた人物である。いずれも回想録のため不確実な面は残るが、副本の借用が謄写を目的としたものであったことは窺える。四三枚の大図は二、三県をはるかに越えるが、二一四枚全部が謄写されたかどうかとなるとやや疑問もでてくる。「関八州輿地図」と称することについては、地理局がまず関八州大三角測量を計画(明治九年)し、その進行をみて全国測量へときりかえていることから、関八州測量の基礎資料としてこれを優先的に謄写したということも考えられる。明治初期の伊能図謄写をめぐる現在わかつている消息は以上のようなものである。

さきに地理局旧蔵印について述べた際、本図については保留した。

本図には四三枚中のいずれにも印記は見られない。しかし、「第九五 信濃 上野」に「関八州用大川ヨリ預り」という付箋がある。姓だけしかないので確かではないが、これは当時地理局に在籍し、前掲の

『伊能忠敬事蹟集纂』に「東河伊能翁小伝」の記事を寄せる大川通久を想起させる。印記はないがこれらの図の起源を地理局にもとめる有力な根拠といえよう。この図は「伊能忠敬展」で展示される予定である。

文化十二年に命をうけたとされる『日本輿地全図』作成にあたり、忠敬は態勢が十分に整わなかった初期の東国の測量については補測を願っており、全図作成と平行して関東の街道支線、川、湖沼等の測量許可を幕府に申し出ていたが、これは不調に終わり、かわって江戸府内測量が命ぜられた。本図四三枚中約半数は忠敬としてはなお手を入れたかった部分ということになるだろう。全四三枚を一望するとその心情がしのばれる。しかし江戸府内測量に発展した江戸市中の繫測の結果は、「第九〇 武蔵 下総 相模」図幅に表れている。

当図調査のため、現存するいくつかの大図を閲覧する機会を得た。このうち歴史民俗博物館所蔵で従来寛政十二年上呈大図とされてきた奥州街道の二図については当図と同系の最終版大図模写図であると見られる。前記のようにこの地域についてのデータは寛政十二年時点のものを出ていないので早くからこのような年代推定がなされてきたものと思われるが、料紙、描法も当図と酷似するだけでなく、裏面に記された「第五六 岩代」「第六九 下野」の文字も同じである。なお「第五六 岩代」は当図の範囲内で唯一欠図となっている部分である。同館の残る三枚の最終版大図も同系のものである。当図のうち「第五四 磐城」に「二枚写」という付箋があり、部分的に複数模写されたものがあつたのではないだろうか。

六月の「貴重書展」では本図の一部を電子化し、隣接図の接合なども画面上で実現できるように展示ができるよう準備中である。

(すずき じゅんこ・国立国会図書館特別資料課)

「伊能忠敬展」の舞台裏

渡辺 一郎

江戸東京博の「伊能忠敬展」が盛況である。伊能忠敬研究会が結成されて富岡八幡宮での歩測大会・清澄庭園の懇親会をおえて、ようやく会らしくなってきた九六年夏ごろ、「伊能忠敬展」を東京でやりたいね、という話がでて、デパートがよいか、博物館がよいかなどと理事会で議論のあと、江戸博に持ちかけることにした。

学習院女子部の齋藤教頭(編集委員)と江戸博に行って企画を提案したのは、九六年八月十五日であった。それから色々あって正式に決定を聞いたのが十一月二〇日。すぐに何かと相談に乗っていただいている国土地理院の野々村院長にお話したら、朝日新聞の清水健宇さんに連絡をとってくれた。清水さんからファックスがあり、アワ・プランニングの佐藤嘉尚さんと研究室においでになる。清水さんはそのとき、すでに日本歩け歩け協会の木谷専務と会って『忠敬の道』をたどって日本を歩くという企画を話し合っており、これは面白いということになっていった。九六年十二月末であった。

清水・佐藤組は「忠敬の道」を歩くという企画を前から温めており、江戸博の「忠敬展」決定をうけて、一気に動きが早まった。日本歩け歩け協会が組織決定し、朝日新聞社としての方針がきまる。同じ頃、俳優座の古賀社長が朝日新聞と舞台劇「伊能忠敬物語」の上演について話し合っておりこれも固まった。ついで、江戸博に企画委員会が設置され、渡辺、齋藤が委員に就任して作業が始まり、こんなにちがったものである。

「伊能忠敬展」を東京でやるのは多分はじめてであるが、まず、普段見られない伊能図を見てもらうのがよいと考えた。検討段階から、伊能忠敬研究会の事務局として、英国グリニッチの国立海事博物館へ手紙を送り、日本の某大博物館と交渉中だから、決まったら貸して欲しい、手続きはどうするのかと問い合わせた。グリニッチからは「三十余年うちに保管していたが、いまは海軍水路部に返せといわれたので水路部にある」と。そこで、水路部に手紙を出す。水路部からは公文書館の管理になっているので、そちらにまわしたから、公文書館から返事があるだろうと回答がある。

ほどなく回答が公文書館のフォード女史からとどき、細かい条件のあとで、面倒だからレブリカにしたらとあった。ノーといっていないのですぐ反論し、「条件のクリアは問題はない。博物館はグリニッチの博物館と同等以上の設備をもつ有力な博物館である。我々は本物を多数持っている。本物と対比するための展示なのだから、レブリカでは意味がない」決定したらすぐ連絡すると書き送る。

企画委員会が発足すると、直ぐ英文カタログを同封して、江戸博の企画委員という肩書きで、まず、決まったから貸して欲しいとの第一報を、海事博物館、水路部、公文書館あてに出す。その後、江戸博からの正式要請文書の送付、朝日新聞の全面協力があるて実現したものである。里帰りの楽屋裏を少し披露しておく。

(江戸博の図録は当会で編修にあたりました。「忠敬と伊能図」と題して江戸博で販売されています。自分ながらよくできたのではないかと思っています。会員の(株)アワ・プランニング佐藤社長が陣頭指揮で制作したもので、忠敬のことを一冊で、といわれたら文句無くこれだという感じです。江戸博の学芸員も脱帽だそうです。)

富岡美術館展を終えて

浅井 京子

「江戸博の前座です」と称していた富岡美術館展は三月十五日、無事終了しました。ところで、館蔵の『勝家伝来文書』の公開を目論んでいた頃、私は世田谷伊能家の文書を読む機会を得ました。その最初が展覧会では「請證文」として展示した箱訴に関するものです。慣れない江戸文書と取組み、ゾクゾクするような面白さを味わいました。この体験が、勝家文書と伊能家文書を取り合わせるという、傍目にはとんでもない企画を生み出したのです。勝家文書で古文書を読む難しさとは面白さに開眼していた二人の館員は、自分達が一番最初に感じた戸惑いと喜びをこの展覧会の構成の基本にしようと決めていました。そんなこんなで、忠敬・海舟は日本の近代化を考えるうえで非常に重要であるとか、海舟が『追賛一話』で忠敬を語っているから二人の接点がないわけではないというのは「どうして二人なんですか」と問い詰められての少々苦しまぎれの口実といえます。

現実に戻って第一の課題は、富岡美術館という制約された展示空間で、忠敬を地図の人としてしか知らない人達にどう知ってもらおうかということでした。時間に追われた資料読みと伊能洋夫妻の助言を受けるうち、展示の中心は佐原時代と女性達ということに決まりました。とはいっても地図の仕事にまったく触れないわけにはいかず、伊能図の概念がいまひとつという人のために、渡辺一郎氏の制作した複製本を鼻につけても見られる壁に張りつけました。また、数点の測量下図・魚絵図・本図・先触れなどによって地図を作っていく過程を確認できるようにしました。特に二点の下図は誰にも地図作りの凄まじさを想

像する有効な手がかりとなったようでした。佐原時代の名主としての忠敬を象徴する仕事としては川岸一件の記録と家訓、伊能家の気風を体現化した史料として『景利日記』を展示しました。また、みち・いね・りての三人の女性の手紙とのぶに触れた忠敬の手紙（写真）を展示しましたが、これらの手紙は予想以上に女性達の存在をアピールしたのだと思います。当時の女性達はただ忍従の生活を送っていたのではない、とその書体は語っていました。父忠敬に逆らって夫と添い遂げることを選び、その死後は父と和解して伊能家を支えたいねという女性、病弱な夫の片腕として義姉と力を合わせて働くりてという女性の姿を様々に想像させました。

今回は忠敬の興味の変遷を知るうえで重要な隠居以前の二冊の旅の記録や、当時の天文学の水準を語る高橋至時の『ランデ管見録』の実物を展示することはできませんでしたし、忠敬の蔵書を分析考察したいという思いは手付かずで終わってしまいました。先触れ展の役割はなんとか果たし得たでしょうか。

最後に、地元大森付近ということで注目度の高かった下図（A）および着彩の地図（B）について記しておきます。両者に針穴があり、BはAを用いて作製されたと考えられますが、A・Bでは羽田から川崎方向の向きが逆になっています。Aの表には「此下図方位前後違裏ヲ用べし」、裏面には「不用といへとも すておかじ候 品川より大もり羽田海邊之分図ま一ノ内ニ加」と書かれ、Bにはそれぞれ色が山・田・埜・海川を示すことが記されます。またBは裏面にも針穴を手がかりに側線が引かれています。この裏面の側線が本図制作上はたした役割はまだ私にはよくわかりません。しかしこの対応する二図によって、下図から本図を起す方法を理解することができ、方位の前後を書き違えた下図も臨機応変に使った様子が伺えニヤリとしくなります。

都民カレッジ

「伊能忠敬再発見」を受講して

岡山 宣孝

一 「縁」について―はじめに―

私の書棚に、小学生だった頃両親に買ってもらった『測地探検の祖・伊能忠敬』(二反長半著・偕成社)『北海の探検家・間宮林蔵』(吉田與志雄著・偕成社)の本があります。すっかり紙が茶色っぽく変色している本を見るたび、はじめて読んだ時の「地図も無い所に行き、地図をつくった事」への驚きを、はつきり思い出します。

大学に入ると、伊能敬先生が「化学」担当でいらっしゃいました。文系の私は、「化学」の講義を受講することなく、先生とは挨拶程度の四年間でした。「おだやかな雰囲気」の先生でした。「化学」を選択しなくとも、研究室に行き、「伊能忠敬」についてお聞きすれば良かったと、今になると非常に残念に思っています。

二年前前までは、出張でなかなか自分の時間が取れませんでした。担当がかわり、時間に余裕が若干出来た頃、雑誌で「伊能忠敬研究会」のことを知りました。早速入会した所、郵送されてきた会員名簿の中に、高校時代の恩師の齋藤仁先生の氏名を見てびっくり。先生の「地理」の授業は、毎回ガリ版刷りの資料を二、三枚配布し、熱意あふれる時間でした。

時には、先生の自由ヶ丘のご自宅に行き、人生論らしきものを聞いて頂いたことも何回もありました。

社会に出てからもお会いしていたのですが、次第に忙しさにとりまぎれて、ここしばらくは機会がなかったのですが、今回同じ研究会に「縁」というものを、実感しています。

二 「伊能忠敬再発見」カリキュラム

ポスターを見て、数回の欠席を覚悟で「都民カレッジ」の講座を申し込みました。

一月十日から三月七日までの毎週土曜。講座は午後三時から四時半まで。東京国際フォーラム地下一階・都民カレッジ講義室で行われました。(一)内は、担当講師の方です。

- (一) 開講にあたって (渡辺 一郎)
- 挨拶 (伊能 陽子)
- (二) 伊能忠敬と佐原村 (小島 一仁)
- (三) 文学少年から科学者へ、隠居後なぜ天文暦学へ進んだか (佐久間達夫)
- (四) 伊能図のはなし (渡辺 一郎)
- (五) 見学会・集合富岡八幡宮 (渡辺 一郎・伊能陽子)
- (六) 全国測量の旅一 (渡辺 一郎)
- (七) 全国測量の旅二 (渡辺 一郎)
- (八) 伊能忠敬の測量法 (渡辺 一郎)
- (九) 伊能測量をめぐる多様な人的ネットワーク (安藤由紀子)

三 具体的内容について

(一) 渡辺氏の講義

伊能隊の測量風景などを、資料のOHP・実物投映機を活用して、非常にわかりやすく話して頂けました。

『伊能測量隊まかり通る』の内容が、より具体的に理解出来るようになりました。

(二) 小島一仁氏の講義

忠敬の人生に大きな影響を持つ佐原時代の位置づけを明確にして頂けました。

(三)

「忠敬は、家のため村のために何をしたか」と同時に、「忠敬は、家や村の生活から何を得たか」の視点は、新鮮でした。商人的合理精神、武士に負けない人間としての自信、測量・地図・数学から暦学の素養、伊能景利の影響、記録能力、統率力等。安藤由紀子氏の講義

忠敬をめぐる多様な人的ネットワークを四つのグループに分けて話して頂けました。

第一グループ（天文方関係）

麻田剛立・高橋至時・間重富・高橋景保・坂部貞兵衛・

箱田良助・間宮林蔵

第二グループ（忠敬とその家族）

第三グループ（仙台藩々医・自由な知識人）

工藤平助・大槻玄沢・桑原隆朝・杉田玄白・山片蟠桃・

橋本宗吉・林子平・会田安明・司馬江漢

第四グループ（科学する大名・旗本）

伊達重村・島津重豪・松浦静山・朽木昌綱・土井利位・

堀田正毅・堀田摂津守正敦

時代の流れと人脈について、実感出来ました。

伊能陽子氏には、見学会での説明等でお世話になりました。ただ残念なことは、仕事の関係で欠席し、佐久間達夫氏の講義を受講出来なかった事です。

四 日をあらためての訪問

「見学会」で行った場所を、再度歩いてみました。

(一) 伊能忠敬住居跡

① 東京都江東区門前仲町一―十八―三のそろばん塾前の歩道に碑。

② 「日本東半部沿海地図」上で、最初に零度の子午線を通した地点。

(二) 真言宗賢法寺法乘院・深川ゑんま堂

① 江東区深川二―十六―三。

② 伊能家の江戸の旦那寺。

③ 仇討ちで有名な曾我兄弟の五郎の残した足跡の石も境内にあります。

(三) 間宮林蔵のお墓

① 江東区平野二―七―八先。食品店とクリーニング店との間の区画。

② 林蔵は、晩年、幕府の隠密となった為に、訪れる人も少なかったと言われていますが、お墓が町並みの中に有り、そのうつろいとともにある事に、一種の安堵感を持ちました。

(四) 松平定信のお墓（浄土宗靈巖寺）

① 江東区白河一―三―三二。

②定信は、老中時代堀田摂津守正敦（まことあつ）を若年寄としています。

③江戸の各街道の出入口に造られた六地藏の第五番もあります。

(五) 伊能忠敬のお墓（浄土宗源空寺墓地）

①台東区東上野六―十八―十二。

②忠敬・高橋至時・幡随院長兵衛夫妻・谷文晁・高橋景保のお墓が、横一列に並んでいます。

五 おわりに

「伊能忠敬再発見」を大変楽しく受講が出来、感謝しています。

受講することにより、伊能忠敬という人物を生み出したものは、次の五つのことではないだろうかと考えるようになりました。

(一) 時代的背景

商品経済が進み、経済的余裕と精神の自由と知的好奇心を持った層が厚くなりつつあった時代の流れ。

(二) 佐原の風土

佐原が城下町ではなく、「自治的」な町の集合体であり、利根川の水運を中心とした地であったことは、自由な発想が出来る雰囲気が存在した。

(三) 忠敬自身の知的好奇心（近代科学精神）

利根川堤防の修築等、名主の職務をはたす為の測量術と数学からその当時暦の誤りが問題とされていた暦学への興味。

(四) 人脈

仙台藩の米は、佐原を通して江戸へ。

仙台藩の財政建て直しの話しが、升屋にあったのは、天明のはじめ頃。この升屋の山片蟠桃（やまがたばんとう）は大阪の懷徳堂に通い、天文学の

方は麻田剛立（まくだこうたけ）に学んだ。

忠敬の後妻ノブは、仙台藩医桑原隆朝の長女。隆朝は、仙台藩十二番目の藩医。仙台藩六代宗村の子の一人が、堀田摂津守正敦。（若年寄を四三年間つとめた）

麻田剛立門下の高橋至時と間重富が、幕府の暦局に。

仙台藩に関係ある知識人のつながりと支援態勢が、うかがえる。

(五) 自由に行動することの楽しさ

測量をくりかえすことの中から、自由に新しい土地に行く楽しさを知ったこと。朝日・雲・海・風・神社仏閣等との出会いが、新鮮な魅力を忠敬に感じさせた。

四月からの江戸博での「伊能忠敬展」。五月には伊能忠敬記念館オープン。今後とも行動半径を広くとっていいこうと、考えています。

（おかやま のぶたか・セブニーイレブンジャパン取締役）



お信さん（つづき）

安藤 由紀子

佐原と仙台（2）

下利根沿岸の北総地帯と九十九里沿岸は、天領（幕府直轄地）、譜代の小藩、旗本知行地、江戸の南北町奉行組と力給知の四つのかたちで、複雑に絡み合って支配されていた。

例えば佐原村は、数人の旗本によって分割知行されたこともあったが、忠敬が伊能家に入った頃は天領で、やがて津田山城守という六千石の旗本の知行地になった。



林玲子+大石慎三郎『流通列島の誕生』より

この、四種類の小粒な主人たちの領地は、広い意味では幕府領と考えてもよいだろう。そして初期には、東北の雄、伊達藩への睨みのためだったという説もある。しかし皮肉にも、徳川政権が安定すると、東北の産米・産物は川船で石巻港へ集められ、大船に乗せられて千島海流に乗って南下したのち利根川に入り、銚子か佐原で一度下ろして川船に積み替え、旧利根川をへて江

戸へ送られた。北からの物資はほとんどこのコースを取っていた。房総半島をまわるコースは海流の関係で江戸湾に入るのが難しかったからである。潮来に仙台藩の蔵屋敷があったが、土砂の堆積による浅瀬化と利根本流の流路の変化（佐原―小見川―銚子への直行）によって、安永の頃から次第に使われなくなってゆく。こうして佐原は当然繁盛する。銚子とともに人口五千人を越えた関東でも数少ない町場であった（現千葉県全域で二か所）。佐原の人々にとって「伊達さま」は、いちばん馴染みの深い他国だったと思われる。

忠敬と仙台米

米商人であり、酒造業者でもあった伊能忠敬は、仙台の米がどう動くかに常に注目していた。味もよく、江戸で人気商品だったらしい。忠敬はもちろん上・下総、常陸、安房からも米を買い付けていた。そして底値の時に酒用の米を手配し、江戸の値動きを見ながら高値の時に飯米を売るのである。

幕末の文久期の例であるが、江戸に二二万俵の米が入津し、そのうち①幕府米（天領の米）が二三パーセント、②藩米が二五パーセント、③商人米が五二パーセントであった。商人米のうち上方からの下り米は五万俵だけで、ほとんどが関東の米であった。

②の江戸に運ばれた藩米の中で最も多いのは仙台米である。北上川流域は江戸へ米を供給する一大穀倉地帯で、仙台藩は初めから「買米制」と呼ばれる米の専売制（年貢の余剰米を藩が独占して買い上げ、江戸で売る制度）をしき、南部米も買い、寛政三、四年頃には五〇万両もの利益があったといわれている。仙台藩は深川に広大な蔵屋敷を持ち、引き込み口の隅田川への支流は、今も仙台堀川と呼ばれ

ている。

忠敬書簡には米相場に言及し、婿盛右衛門に指示を与えるくだりが大変多いが、「江戸の米相場はその後同様に変わらず酒も同じの由、困ったことです。その上仙台、南部米が春までに入津すると、初春でもよい値段は期待できないでしょう」「船頭に手紙を持たせ、銚子の信田清左衛門へ遣わし、いよいよ江戸へ米を回したいからと申し入れた所、仙台、南部米とも残らず積切ってしまい米は一切残っていない、面目ない、とのことでした」「米相場はこの節如何ですか。奥州米が入ったので、値上がりは望めませんか。一両につき一石一斗五、六升に戻ったら、在庫の米を売り付けなさい」という調子である。

史料 一

一五九 「伊能忠敬書簡」『千葉県史料・近世篇』

(江戸店) 盛右衛門(婿) 外宛

寛政年間 五月二六日

(前略) 一、佐原米相場の件、二三日付けの手紙の別紙に書いておきましたが、今佐原も在の方も品切れ(中略)田植えて津出し出来ないで、高値で品が少ないのかと五十嵐そのほか米買人に尋ねてみました所、物が無いのは間違いないようです。たとえ江戸で奥州米、御蔵米が豊富で当分下値だったとしても、行々は上がるはず、少しの値上がりで所持米の売付けは御無用、最早米も今江戸にあるだけなので、格別の値上がりを待って売るようにしたいものです。(後略)

「奥州紀行」

安永七年三四才の忠敬は、妻ミチを伴って奥州松島へ旅行した。

「奥州紀行」という簡単な旅行記がある。地方の豪家の主人に当時よくみられた風雅を楽しむための旅行のようであるが、この大地が奥州米を産し、この港から積み出されるのかといった感慨があったにちがいない。

史料 二

「伊能忠敬測量日記」『千葉県史料・近世篇』

享和元年(一八〇一)九月八日条

余先年奥羽松島遊覧しけるニ、頃は皐月末の八日佐原を出立、銚子と云所まで乗船す、風波ありて尺取らず、漸ニ串挽へ着て船泊りしける、傍にも旅人乗し舟ありける、苦越しに物語れハ、松島より遠き分ケ濱と云所の秋山惣兵衛と云者にて、交易の事ニ銚子港へ来り復其国へ帰りけるなり、彼人云けるハ一人旅の物寂しけれハ願くハ同伴し賜へかすと乞し程ニ、此方も旅馴ぬ身の幸と同道しけるニ、日々驛次止宿の事などいと懇ニ執斗ひける、十日程を経て仙臺の城下ニ着けるニ、此所の名所なと案内し、且酒食迄も篤く響應しける、別ニ望て宗兵衛云けるハ、貴邦ハ吾郷を去る事百里余の山海を隔てぬれハ枉賀難かるへし、余ハ交易の為ニ銚子港又ハ東都へ幾度も往来す、其行路なれハ必尋ね問んと約して別れぬ、夫より年を経ぬれと互ニ音信もせさりしニ、此度 台命を蒙り國々の海邊を来往しける、此國の守よりも令ありて止宿の事迄も沙汰せられけるニ、不思議ニ此分ケ濱なる秋山惣兵衛なる者の家ニ舎り會ぬ、真ニ深き因縁にてそありける、終夜往事を語り合ひ、指を屈すれハ安永戊戌の歳にて二十四年ニそなりける、主じも別離を惜み此先の泊々二三日之間送別しける

途中奥州分ヶ浜の秋山惣兵衛という人と何日か道連れになって世話を受けた。惣兵衛は奥州の港から海産物を仕入れ銚子から江戸へ入って卸していて、「今度は必ず佐原のあなたの家に寄るから」といつて別れた。二四年後第二次測量の時、偶然彼の家が藩の決めた宿になった。惣兵衛は別れを惜しみ、二、三日測量についてきた。この因縁に感動して忠敬としては珍しく、測量日記にちよっときどった一文を挿入している。忠敬は無駄に物見遊山をしたわけではなく、初めからそのつもりで、奥州とその物流をその目で見て来たのではなからうか。

桑原隆朝―堀の外の仙台藩医―の暮らし

おノブさんの実家桑原家は、どんな暮らしをしていたのだろう。十三号で紹介したノブさんの従姉妹、只野真葛さんの『むかしばなし』によれば、桑原隆朝は常々「私が出入りせぬ大名家はないほどだ」と言っており、真葛さんの父、隆朝の義兄にあたる工藤平助と同じように裕福で名医だったらしい。桑原嫌いの真葛さんも「おじ様ほどの才人」と、その能力を認めていた。

桑原家の史料はないので、仙台藩当主・家中以外に工藤平助がどんな患者を診ていたかを『むかしばなし』から拾い出してみよう。井伊家当主、老中松平右近将監武元家中、板倉周防守家族、鍋島家老、そのほか、小大名の家族、多くの旗本家、松前藩用人のお妾さん、浅草の町名主、裕福な商人たち、芸者、やくざに至るまで実に多彩で、それらの人々の面白い話を父から聞いて、真葛さんは『むかしばなし』に披露している。江戸文化最後の華を見る思いがする本である。

永井路子氏はこの本を材料にして『葛の葉抄―あや子江戸を生きる』という小説を書いておられる。この本から引用して「堀の外の藩医」

の役割について一考してみよう。工藤平助の没落後、その役割は桑原隆朝が引き継いだと思われるからである。

「伊達家も平助の許に人々が集まることは黙認している。情報というものは一方通行でなく、来客たちも必ず見返りになんらかの情報を提供していくからだ。（中略）大名同士が表だって親しげに交際することは人の目につきやすく、とかく問題の種になるが、水面下で交際の輪が広がることはお互いにとって大変望ましいことなのだ。この点工藤平助が藩邸外に住み、しかも医者であることは、目くらましのために大変幸いであった。こうした存在は各藩に必ずいた。」さらに付け加えるならば、身分社会を縦断する様々な人達との出会いは、彼等藩医の知識と視野を広げたにちがいない。藩の数は二六〇（二七〇）といわれているから、少なくとも五百人以上の優秀なフリーランサーの情報通がいたわけである。

（桑原隆朝の住所を変更します）

雑誌の十二号で私は、桑原隆朝が深川の仙台藩下屋敷の脇に住んでいたと書いた。文政十一年の地図には伊達家蔵屋敷のすぐ北に「大工町」とあったからである。ところが、大槻玄沢の『官途要録』の藩医名簿には「常詰 日本橋大工町 桑原隆朝」とある。どちらが正しいのかと切絵図をいくつか当たってみると、「大工町」だけの地名は本来なくて、私の目にした範囲だけで「元大工町」「南大工町」「竪大工町」「横大工町」「海辺大工町」と五つもあり、最後のものが深川であった。江戸の町が無秩序に膨張した結果こんなことになってしまったのだ。この内日本橋に一番近いのは「元大工町」である。私は十二号の記事を訂正しなければならない。舞台は御城に近かったのだ。

そして次に紹介する史料によって、元大工町が桑原隆朝の住所であったこと、天明二年頃にはすでに営まれていた伊能家の二つの江戸店に近かったこと、が分かる。

史料 三

B二三八 伊能忠敬書簡 (世田谷伊能家文書)

イネ (長女) ・新兵衛 (第二江戸店) 宛

寛政年間 四月 三日

(前略) 一、牧野村観福寺御院家

今日弥、御出府被成候。先日

申遣候通り、御旅宿

日本はし、かやは町辺か

もし彼辺ニ、無御座候ハ、

石町辺ニても、座鋪ハ少

御座候ても、内雪隠、湯殿等

有之候所、御かり請被成

米、塩、噌、薪等御取續

御世話被成下候様、頼入候。

大工町御療治御頼被成候へハ

是又宜被仰立、御頼可

給候。御療治諸事

御不勝手之儀、御心支

御世話無之様、両店之内

ニて御賄被下候共、旅宿

大家へ通帳ニて相頼、執斗

くれ候共、宜頼入候。今日も

大風雨後、大水、西風に

御座候間、御さし留申

上候得共、急に御出府

御養治被成度、御頼

ニ付、押て御出立ニ御座候。

猶追々可申入候。

以上

四月廿三日

東河

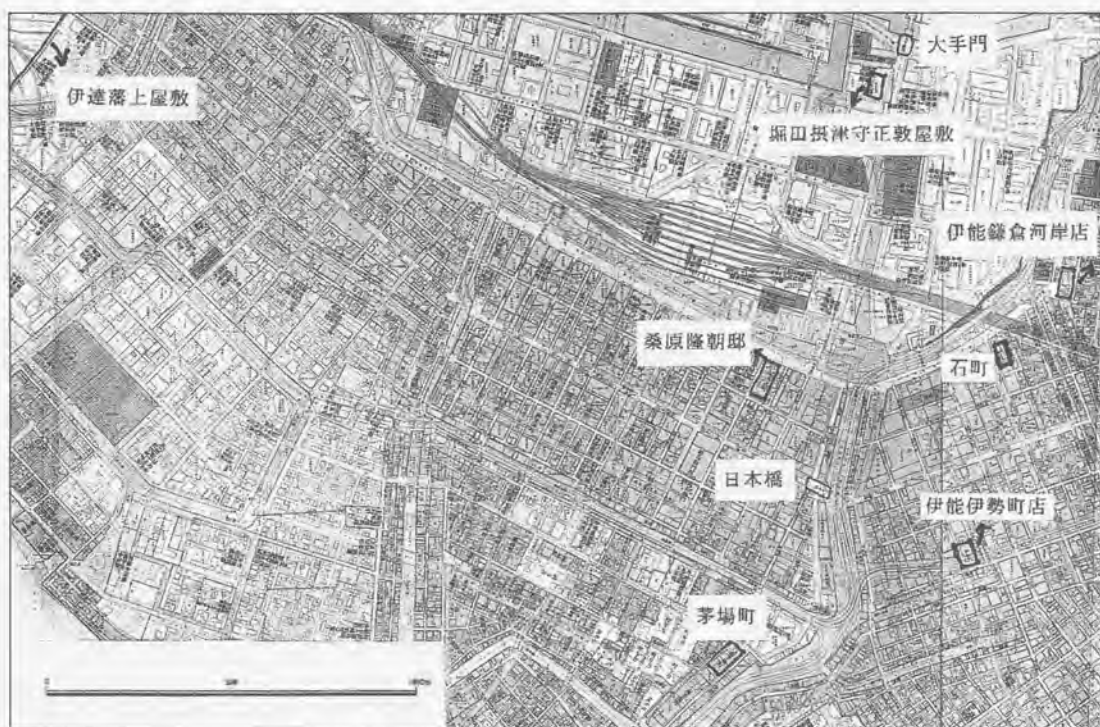
おいね 殿

新兵衛 殿

「観福寺 (佐原の菩提寺) のご住職が今日出府されました。先日言
い付けた通り、お宿のこと日本橋かやば町辺か、もしなければ石町の
辺りで、座敷は狭くても内便所、内風呂のあるところを借りて、米、
塩、味噌、薪などのお世話をしてください。大工町のご療治を御望み
の時はお頼みして、万事宜しくお世話願います。賄いは両店でするも
よし、大家に通帳で頼むもよし、宜しく願います。大風雨の後で大水、
西風なので、お止めになったらと申上げたのですが、急にご出府ご療
治なされたき由、押してご出立なさいました」鎌倉河岸店の長女おイ
ネと、伊勢町店の加納屋新兵衛宛になっている。

次頁の地図を見れば茅場町も石町も日本橋に近く、桑原隆朝は「元
大工町」に住んでいたと考えるのが妥当と思われる。ここから呉服橋
を渡ると大手門外の堀田摂津守邸まですぐだし、御堀ぞいに西へ二キ
ロほどで仙台藩上屋敷がある。

さて、からだの弱い長男景敬を鎌倉河岸へ預け治療を受けさせると
したら、忠敬さんはどんな人を選んだだろうか。佐原に馴染みの「伊
達さま」の藩医で、御近所で、しかも名医の評判の桑原を、もちろん



『東京人』付録「江戸東京四百年記念江戸復元図」より

仙台米の情報をも期待して主治医に選んだのではなからうか。そして前号で引用したように、しょっちゅう往診してもらうほどの付き合いが八年も続いたのだ（寛政二年の結婚まで）。忠敬とノブさんは顔を合わせることもあるだろうし、後にお察しいただけると思うが、この縁組は双方にとって大変有利だったと思われる。あくまで状況証拠からの推測ではないが。

右衛門七

おノブさんと忠敬の間には右衛門七という子が生まれて直ぐ亡くなったことになっている。しかし生没年不詳、墓もなく、伊能家の過去帳にも記載がない。世襲名の三郎右衛門から三郎を取って七番目の子という意味で付けたのだらうが、外の庶出の子の名と比べるとさすがに格の高い名なのに、過去帳にないのはどうしてもふに落ちない。この子の謎解きは、何年後かのお楽しみということにしておく。

ノブさんは寛政七年三月十四日没。戒名は『浄蓮院成實妙貞大姉』という。

(了)

参考文献

- 林玲子・大石慎三郎『流通列島の誕生』講談社現代新書
- 潮来町史編纂委員会『潮来町史』
- 『伊能忠敬測量日記』、『千葉県史料・近世篇』
- 只野真葛『むかしはなし』平凡社・東洋文庫
- 永井路子『葛の葉抄』PHP文庫
- 賀川隆行『日本の歴史14 崩れゆく鎖国』集英社

伊能家文書紹介八

その二

南海鵬右衛門

伊能 陽子

「南海鵬右衛門」と署名のある、墨の色も鮮やかな書き付けは、文書の整理を始めて間もない頃から気になっていた。「鵬」の崩し字が読めなかったせいもあったが、読み取れた文中の「平戸領」「大村領」と、なんと似合っている名前だろうと、感心していた。

その「南海^{みなみ}さん」に会えたのは平戸を訪ねた昨年のもので、八年も経っていた。松浦史料博物館で彼の資料を頂いたときは、尋ね人に巡り会ったような気がした。切米拾石取りの南海鵬右衛門は、文化八年に江戸へ出て、その後何度も江戸と国元を往復し、江戸裏判役席、上使方御用掛、勘定役とお勤めをして、江戸で亡くなっている。

測量隊のための、現地の絵図や順路の説明などは、実際の測量のかなり前に提出するのであろう。平戸の測量は、第八次測量、二度目の九州測量の時である。南海鵬右衛門の書き付けに八月とあるが、測量隊が江戸を発ったのが文化八年十一月、平戸に入ったのが文化十年の正月だから、九年の八月か。しかし、鵬右衛門は文化八年八月に江戸へ出ているから、もしかしたら、この書き付けを届けるためだったかも知れない。

史料 一

A四八

(世田谷伊能家文書)

平戸領江御越被成候御順道

南海鵬右衛門

大村領境舩峯番所より

早岐浦迄三拾四町余

此所より御入被成候得は 高峯にて

海上見切り宜 大抵早岐筋

針尾島と申所 海陸之恰好

凡相分り申候場所 右舩峯

海道より御越被成 早岐浦へ

御止宿 夫より御測量御始

被成候方 可然哉と 此方にては

奉存候儀ニ御座候

佐賀領境木原番所より

早岐浦迄式里五町

他領御廻被成候御都合ニより

此所より御入被成候ても宜敷

御座候得は 是は山之手ニて

平地見切も無之場所ニ

御座候

一 右早岐より御順道

日字村 壹里拾六町

佐世保村 壹里拾貳町

相神浦村 壹里式拾六町

佐々村 壹里拾四町

江迎村 式里拾四町

小手田村 壹里式拾八町

御厨村 式里余

志佐村 式里

今福村 壹里貳拾町

但 今福より佐賀領境
此所より 福嶋御渡海

一 海上

福嶋 今福より貳里

鷹島 貳里

大嶋 凡五里余

度嶋 凡壹里余

生月嶋 三里

但 此所より平戸城下へ

御渡海 三里

一 平戸嶋より

壹岐国 拾三里

対馬 四拾八里

一 対州御測量相済 壹州へ

御引取 壹州より平戸へ御

渡海 是より

平戸領

小値賀嶋 城下より拾八里

此所より 五嶋濱野浦と

申所江七里御渡海 平戸

五嶋入合領筋 御測量

五嶋へ御越被成候方

御順道と相見得申候

一 壹州対州御渡海頃合

船手方 得と穿鑿仕候処 年中

時筋ニ不拘 天氣次第 渡海

仕候事ニ 御座候得は 荒海之義ニ

候之故 毎々危難之義 御座候付

八十八夜過キニ相成候得は 天氣

定り 危義は無之と相心得

居候趣ニ御座候 依之八十八夜

過 御渡海被成候御都合之方

可然奉存候

一 平戸領境

地付

東 佐賀

南 大村

但 針尾嶋と申候所

大村海境ニ相成申候

海上

東北 唐津

西南 五嶋

右之通 先一通相認奉入

御覽候 猶 委細之儀は

当領内へ御越被成候上

追て 御窺可申上候 以上

八月

このように丁寧な案内を受ける測量隊と、対照的なのは迎え入れる
国元である。次の資料は、松浦史料博物館に残されている貴重な記録
の中から見せて戴いたもので、大変生々しい記述があり、受入れ側の

苦勞を、改めて感じさせられたのである。

御家世伝草稿卷之六十三 乾齊公傳六 (松浦史料博物館)

『文化十年正月十七日 測量方を迎えるについて、その費用を新田課税で調達するように命ぜられた。』

年寄方日記より

勘定奉行へ次のように

測量方が差し回されることは、さる丑年にご老中からお達しがありました。その後、次々と先触れなどが着き、今年の春頃から九州方面の測量があり、次第に当地へ入る予定なので、対応について測量方お役人 伊能勘解由方へ問い合わせたところ、今度の測量は街道筋村々といっても、海辺や渚回りが主なので、小船を含めて数隻必要な測量であり、したがって、人数なども前以て準備するよう言われました。

右の準備のため、さる十一月末から早岐へ問い合わせたところ十二月八日よりご領内に入り、早岐、針尾、相神浦方面を測量したとのこと。当地は他国と違い海辺や島々が多く、どれほどの日数になるかも分からず、かなりの経費が必要であります。

ご公用土地改めの件は、当藩へのお申し付けなので、必要経費は領内の納税で賄うことに一同承知致しましたが、一昨年、対馬に朝鮮信使来聘の際は、大変な費用がかかりました。

近年、一万俵の蓄え米もおおせ付けられ、昨年もこれを返して頂けないので、今回はいくらご命令と申しましても、領内に承知させることは難しく、といって、昨年の貯え米一万俵で、測量方の費用を賄えば、特別の税をとらなくても済むと触れたいところですが、今年も幕府から「蔵預かり貯え米俵物改め」のお役人がお出でになると、御勘定奉行からお達しがありましたので、右の俵もの改めが秋冬の時節に

なれば、蔵納めの年貢はすでに渡し済みになっていますので、村の貯え米一万俵を俵物改めの為に備えておこなうてはならず、どちらにしても困った事ですので、領内に新田年貢により、新田持ち連中に対して、米を納めるようお願い付け下さい。新田の年貢は割安で、ここ何年も豊作が続き、収穫も多く、お国のお陰で豊かに暮らしておりますので、ご公用の物入りが続き、お上のお困りを理解させ、皆が精一杯納米するように、説得をお願い致します。

酉正月

月番

勘定奉行中

このほかにも、測量に関する記録を、拾い出すことができた。

「二七日測量方明後二九日御城下へ入込□

申来ル 引年寄方日記

年寄方日記云 文化十正月二七日

一 測量方の人々明後二九日御城下へ入込候段申来候旨 兵衛より申達之

「同日 測量方伊能勘解由 坂部貞兵衛等 当町方測量す 二月三日爰元出船 四月五日対州へ連送候旨 牧山仁兵衛謁之」

「年寄方日記云 文化十 正月晦日

伊能勘解由

坂部貞兵衛

今朝六半時過 恵美須渡頭へ着船 直ニ

当町測量始り 昼頃相済候段 町奉行

申達之

一 伊能勘解由初何も 今朝爰元出立の段
町奉行申達之

一 牧山仁兵衛

測量方附廻り 対州迄連送 無滞相済

今日罷帰候ニ付謁之

「十三日 測量方御役人 老岐国へ着船す

年寄方日記云文化十 三月十八日

一 測量方御役人方 去る十三日郷

浦着船の旨 弥一右衛門より由来」

ここに登場している測量方附廻り役、牧山仁兵衛の書状も手元にある。無事に測量を終え、測量隊一行を対馬へ送り届けてほっと一息つき筆を取ったであろう、忠敬宛の挨拶状である。

史料二

B 六四

(世田谷伊能家文書)

一筆啓上仕候 追日暖氣罷成
候之處 愈御勇健可被成御座
目出度御儀奉存候 先以去歳は
初て拝顔仕 数日何角御懇情
被成下 御影を以 無滞御附廻
仕 大悦奉存候 其後は 彼是
仕候て 書中を以 御安否も
不相同 奉失本意候 御容捨

可被成下候 将亦当春頃ニは

其御許 御引取ニも可相成

御沙汰御座候處 如何頃日

御帰府被成候哉と御噂仕候

年来之御旅行にて 嚙々御

退屈之程 恐察仕候 先右之段

時候御伺申上度 旁如斯御座候

恐惶謹言

牧山仁兵衛

三月十日

有倫(花押)

伊能勘解由様

参人々御中

南海鵬右衛門、牧山仁兵衛両氏の書状がきっかけになり、思いがけなくその当時の平戸の様子に触れることができた。多分、このような状況はどの測量先でも起きた事であろう。大きな仕事の達成の陰に、どれほど多くの人々が振り回されたのかと、しみじみ思った。

じゃがたら文の古布の色が忘れられない。優しい風が通り抜けた細い道。海と空の青さに囲まれた平戸城の、入り口の立て札にただ一行「伊能忠敬が領内沿岸測量のために訪れる」とあった。

私もまた、南海鵬右衛門さんに案内されてはるばる尋ねてきた平戸。なぜかとても懐かしく、美しく保存されていた地図に、もう一度会いたい、願っている。

(松浦史料博物館の久家孝史氏より資料の提供とご指導をいただきました。)

◇連載 第六次測量日記 (八)

佐久間 達夫

秋山・大洲領入会の島々より新居浜まで
文化五年八月

同十日 朝晴。七ツ半頃(松山領中嶋、大洲領忽那嶋)、大浦村(即、大洲領御料所)出立。三手分測。青組下河辺、稻生、基助、予州風早郡 松山領野忽那嶋(即 野忽那村一村なり)一周を測、九ツ前に無須喜嶋(即 無須喜村)着。白組我等、青木、文助、佐助、大浦村より乗船、無須喜嶋へ渡、字阿つ浜(人家なし)より手分、左山に添、無須喜嶋(即村)止宿下迄測で、赤組へ合測。赤組坂部、柴山、善八、同隼字阿つ浜より手分、右山に添、無須喜嶋人家前迄測で、赤組と合測して大洲領の測量終る。共に四ツ後当無須喜嶋止宿。本陣庄屋市郎左衛門、別宿百姓六郎右衛門、大洲郡代手付平井半之進、菊池文兵衛、稲垣甚左衛門、東官治、三井金助、付添案内村役人、北只村庄屋上田八十八、下次戒村庄屋矢野弥兵衛、徳森村庄屋久保京之進、手成村庄屋繁助、一木村庄屋豊治郎、下唐川村庄屋安五郎送別に出る。止宿定掛柴村庄屋岡与一右衛門、飯屋世話人高山村庄屋佐七郎、多田村庄屋忠右衛門、東宇山村庄屋喜惣治、田ノ口村庄屋与右衛門、桑野村庄屋又七郎、宇津村庄屋孫右衛門等暇乞に出る。忽那嶋、宇和間村庄屋石丸平兵衛、松山領風早郡嶋方大庄屋(神浦村庄津和嶋庄屋)、兼清杉田雄五郎、同領(中嶋大洲領忽

那嶋)庄屋忽那親太郎、饒村庄屋小右衛門仲栄蔵。熊田村庄屋野忽那嶋預庄屋兼寄勇治、長節村庄屋与三右衛門(宮野村庄屋、二神嶋預庄屋)兼 順蔵、畑里村庄屋六郎治出る。

同十一日 朝曇天。無須喜嶋七ツ頃出立。乗船。先手白組我等、下河辺、青木、稻生佐助、六ツ後同国和氣郡新浜村枝高浜へ着。同所より初、三津町を通り松山街道古三津村、温泉田西村、衣山村、沢村、辻村、味酒村を歴て松山城下府中町迄測後手赤組坂部、柴山、文助、善八、同国和氣郡堀江村海辺へ六ツ後に着。同所より初和氣浜村、新浜村枝上棚村(同断)、新飯屋村を歴て(同断)、高浜村茶屋前に至て、先手の初へ合測両手九ツ半後松山城下府中町へ着。(郡方下役、浦方下役、領内付添村役人案内、同前)止宿本陣城下会所(亭主役 大年寄、和田屋政左衛門(下役上下、同居)、松山城下案内、町年寄門屋六右衛門、大年寄八蔵屋与兵衛、用掛大年寄米屋徳蔵出る。高浜迄大洲郡方手付平井半之進、稲垣甚左衛門、東官治送別。赤組堀江村海辺へ菊池文兵衛 三井金助送別。又高浜へ大船頭西原作太夫、小船頭竹田佐右衛門、船奉行下役西原文左衛門、付添村役人も一同送別。松山領同国和氣郡太山寺村改庄屋与市右衛門、馬木村

庄屋与兵衛、吉藤村庄屋嘉久治出る。測量初に雨あり。無程止。当城下町方諸役来住、庄兵衛、黒屋五太夫、長井十太夫、麻上下にて出る。(中小姓格のよし)。

八月十二日 朝中晴。松山城下逗留。地図を成。江戸藩局行番状、明日の幸便に相頼。此夜測量。

同十三日 朝晴曇。同所逗留地図。四ツ後より曇。午後より雨。

同十四日 朝大曇。五ツ後松山城下出立。我等、坂部、青木、稻生、文助、佐助、一手測(柴山、下河辺道後へ先行)、府中町より呉服町、新町、清水町、水口町、一万村を歴て道後村迄測。(右村入口に河野古城跡あり。又 八幡社あり)四ツ後に着。止宿本陣温泉主明王院。別宿鹿島屋平吉。此夜大曇。

同十五日 朝より雨。逗留。地図。午後より雨止。七ツ後 八幡参詣。松山領風早郡大庄屋有田友右衛門下難波村庄屋幾右衛門、磯之川村庄屋兵左衛門、中西内村庄屋久次郎、明日止宿辻町本陣飯亭主中西外村庄屋藤右衛門来る。此夜大曇。

同十六日 晚晴。先手坂部、青木、文助、善八、七ツ半後道後村出立。和氣郡堀江村海辺去十一日残杭より初、風早郡小川村、磯河内村、和田村、河原村、久保村、鹿除村、芭木村、中須賀村、片山村、別府村(内に柳原町ありて、別に年寄支配。貢は村納)、辻村の地先(飛地)、土手内村、辻村(辻町あり。領主より地子免許。別に年寄支配貢物は本村より納)、北条村

(北条町あり。年寄支配買物は本村より納。柳原町、辻町、北条町、三町共宗旨人別も別也と)迄測。後手我等、柴山、下河辺、稲生、佐助、六ツ半前温泉郡道後村出立。即、同所より初、和氣郡山越村、姫原村、長戸村、谷村、大内平田村を歴て堀江村海辺迄測。先手へ合測。(和氣郡谷村会所小休。堀江村庄屋基之助中兵、それより乗船して八ッ頃辻町へ着。止宿本陣。年寄布屋勘左衛門(飯亭主中西外村庄屋藤右衛門)。先手は九ッ頃着。別宿。北条町年寄布屋七右衛門。此日小船頭竹田佐右衛門、同役桂作之右衛門、改庄屋大内平田村門屋局兵衛、和氣郡大庄屋井上平兵衛出る。着後、森本周右衛門、下伊垂村庄屋宇兵治出る。風早郡浦方下役越智左五太夫、同役永井喜三右衛門、定付添浦方下役井出武左衛門、同役山瀬勇藏、風早郡大庄屋有田友右衛門、同所庄屋下難波村幾右衛門、寺谷村啓助、猿原村普左衛門、土手内村祐九郎、片山村左兵衛、磯ノ川村兵左衛門、中西内村久治郎用聞、管沢村伴左衛門、庄府村丈右衛門、常竹村控四郎等出る。此夜大曇。四五星測。

同十七日 朝晴。先手柴山、下河辺、稲生、善八、七ツ半頃、辻町出立。風早郡下難波村の内大浦安夫山より初、浅海原村、浅海本谷村を歴て野間郡浜村に至る。後手我等、青木、文助、佐助、六ツ半頃辻町出立。同村持鹿嶋一周を測、それより地方へ渡り北条村昨日強航より初、下難波村を歴て同所字大浦迄測。それより乗船して八ッ頃に浜村へ着。先手は九ッ半頃着。止

宿本陣真言宗新儀福照院。飯亭主池原村庄屋又四郎、野間郡郡方手代細井弁右衛門、同郡大庄屋渡辺源吾、村頭四郎三郎、改庄屋山路村字七右衛門、風早郡大庄屋有田友右衛門、猿原村庄屋音左衛門、土手内村庄屋祐九郎暇乞に出る。此夜大曇。雲間に四五星測。

同十八日 晴天。先手朝七ツ半、後手六ツ半前、野間郡浜村出立。先手我等、下河辺、青木、稲生、佐助、別府村字明神森より初、屋浦村、脇村、大井浜村、新町村(此浜に残杭を成。今治城下より横切の印)、細原村を歴て九王村迄測、後手坂部、柴山、文助、善八、浜村より初、種子村、佐方村、別府村を歴て同村字明神森迄測。先手の初へ合測。先後手共四ツ半頃九王村へ着。本陣大庄屋村頭四郎三郎、別宿改庄屋格村頭忠三郎(領主より佩刀免、即、本陣の親族の由、野間郡改庄屋長坂村元右衛門、西山村改庄屋半右衛門、付添新海程太郎、堀内五兵衛、松山城下より付添、大浦会典の磨象考成をかす。道後にて返す。後に日^{ウツ}推歩の草をかす。此所にて帰す。磨学入門を願。兩人にて太皴嶋一端を送る。八線表月難推歩草二冊をかす。九月末十月初迄に大坂氏氏治送るの約なり。兩人共此日帰家。此夜青曇々。後晴天に成測着。

同十九日 晴曇。先手は七ツ半、後手は六ツ半前九王村出立二先手坂部、柴山、文助、善八、宮崎村字明神崎の浜より初、同村字マテ形(人家六軒)を歴て波方村の内字大杉崎迄測る。後手我等、下河辺、

青木、稲生、佐助、九王村より初、宮崎村を歴て宮崎村字明神崎の浜にて先手へ合測、共に四ツ半頃波止浜へ着(右波止浜の内に波止町あり。此所塩釜四十あり。江戸留、甲州向という)。止宿本陣大庄屋格庄屋長野助三郎、別宿郷土格渡辺政右衛門、野間郡大庄屋村上井右衛門、大庄屋格年寄古川与三左衛門出迎。野間郡郡方手代細井弁右衛門、小船頭高橋八出る。此夜今治城下の宿大西佐源吾幼年に付、飯亭主片山与右衛門来る。今治領大庄屋大嶋本庄村池田八兵衛、四村、青野保弥六、大庄屋藤役今治村石丸弥左衛門来る。此夜。

同二十日 曇天。同所逗留。手分。白組下河辺、青木、文助、佐助、昨日赤組郡留大杉崎より初、波方村波止浜(内に波止町あり)を歴て松山領野間郡波止浜今治領越智郡大浜村境迄測、四ツ半後に帰着。柴山、稲生、善八、来嶋(人家あり。来嶋村という)一周を測、それより同嶋待小嶋(此小嶋にも地分村家あり。来嶋の内也)一周を測、四ツ半前に帰着。讃州丸亀京極能登守郷手代辻順右衛門来向。小松領郡用掛黒河丹治、近藤保助来る。今治領大嶋本庄村大庄屋池田八兵衛、同所字麻郡下山村庄屋喜井伊八郎(即宇治領笹ヶ峯越ノ村)来る。大隈友之丞、御代官所桑村郡河原津村庄屋虎之助、同郡惣代南村庄屋類治、同越智郡桜井村庄屋貞治、同郡惣代朝倉下村庄屋庄被来る。此夜大曇。

同二十一日 朝小雨見合、雨止に付、六ツ半頃波止浜出立。手分。赤組坂部、柴山、文助、善八、波

止浜より一里半斗、直に野間郡松山領新町村に至る。同村浜十八日残杭より初、新町村を通り紺原村(三斗)、宅間村(道より八九丁)、野間村(道より四五丁)、延喜村(同 四五丁)、黒村(同 三四丁)、矢田村(村は右三四丁地先、右の方斗)、山路村(即、人家街道へ出る)、今治領越智郡日吉村枝郷馬越村(街道より一丁斗)、日吉村(即、街道、今治村(即、城下入交り)を歴て今治城下室町、横町通海辺迄測る。白組我等、下河辺、青木、佐助、稲生病氣、野間郡波止浜、越智郡大浜村界より初、石井村、大新町村を歴て今治村海辺にて赤組と合測。共に八ッ後今治城下着。本陣室町横丁大西佐源吾、別宿同柳柳丈作、本陣幼平に付、飯亭主(片山与右衛門、中寺屋鍋治)、掛合、村上藤兵衛当所町方大年寄長嶋友左衛門、別宮喜兵衛測量案内、郡奉行手付竹田藤右衛門、手代野田善勝、日茂伊兵衛、町同心富田善六、田窪丈右衛門出る。松山領野間郡大庄屋渡辺源吾、改庄屋宇土右衛門、延喜村庄屋源助、今日松山領も測量に付出る。当松平彦收守浦奉行村越治都右衛門見舞、並、御使者に出る。御領主より御贈物被下置、我等へ晒木綿五端、秀藏へ同三端、佐右衛門、文助同式端宛。正作、佐助、善八へ半紙三束宛、藤吉へ刻煙草三斤。坂部、柴山、下河辺、青木へ晒木綿三反宛。右僕四人へ煙草三斤宛被相贈。池田八兵衛執斗にて売払。我等晒五反、金巻両巻歩、秀藏晒三反、金三步。佐右衛門、文助晒貳反、即金貳分宛。庄作、佐助、善八、半紙三束、金巻歩宛。

藤吉、煙草三斤、銀三両、坂部、柴山、下河辺、青木晒三反宛、金三步宛、右僕四人煙草三斤、銀三両宛相渡申候。西条領大町村庄屋龜右衛門、同断中野村庄屋新兵衛來向。此夜曇天不測。江戸層局より用状、当城下へ届ありて此夜浦奉行待参。

同二十二日 同所逗留。赤組坂部、柴山、七ッ後出立。乗船。六ッ頃微雨、それより小雨。四ッ後止。今治村持大比較鵜着。雨を見合、四ッ後より大比較鵜一周、小比較鵜一周を測、それより御料所桜井村持大平市堀一周を測、小平市堀を遠測して夜八ッ頃に帰宿。白組我等、下河辺、青木、文助、佐助、今治村海辺昨日合測より初、今治領藏敷村枝古屋敷、藏敷本村、鳥生村、拜志北村、寺河原村、国分村枝郷古国分村(各村海辺より三四五五六町上にあり)を歴て今治領国分村枝古国分村御料所桜井村枝浜村境迄測、それより乗船、八ッ頃に帰宿す。此夜。

同二十三日 晴曇。昨日赤組帰宿遅に付同所逗留。昨日測量落帰宿後松山領周布郡大庄屋野口佐市郎、顯連寺村庄屋与惣左衛門、北田野村庄屋平左衛門、桑村郡大庄屋橋部六郎兵衛、大新田村庄屋七左衛門、大岡久之丞御代官所越智郡桜井村庄屋壯藏、桑村郡河原津村庄屋虎之助、中村東分庄屋理右衛門、高田村庄屋和三郎、今治領今治村庄屋陸治病氣不出。藏敷村庄屋源助、拜志北村庄屋幸三郎、寺河原村庄屋喜三郎病氣不出、古国分村庄屋八兵衛出る。

同二十四日 昨夜より大風に付、同所逗留。四ッ頃

より風止。

同二十六日 朝より晴天。手分。赤組坂部、柴山、文助、善八、七ッ後今治城下出立。松山領桑村郡壬生川村字川向より初、同領周布郡三津屋村、小松領北桑村、同広江村、同今在家村、それより西条領玉之江村、又今在家村の地先を歴て西条領新居郡氷見村の境迄測後手白組下河辺、青木、庄作、佐助、越智郡御料所桜井村枝浜村残杭より初、桑村郡河原津村、桶村、

(西村、黒本村、東村、三ヶ村惣日中村、高田村を歴て松山領壬生川村字川向先手の初へ合測、我等病氣に付、今治城下より同領藏敷村同枝古屋敷、同領鳥生村同村枝高下、

拜志北村、

同領寺河原村、国分村枝古国分村、国分村大岡久之丞御代官所桜井村、岡桜井村(此所にて人馬を継)、長沢村同枝孫兵衛作、桑村郡御料所桶村(此村内に字六軒屋あり)、河原津村、東村、西村、黒本村(三ヶ村を中村という)、庄屋弥惣右衛門にて并当を開く。

それより高田村同枝枝坊寺村、松山領北代村、同領壬生川村、同領周布郡三津屋村、小松領北桑村同領広江村を歴て、同領今在家村へ着。領界へ小松領郡奉行手付桑源徳藏、佐伯善六、郡用掛飯野五郎八出迎、今在家村本陣、庄屋徳五郎、別宿百姓久五郎、普後字驛郡今治領下山村庄屋喜井伊八郎、同郡松山御預御料所用掛中村貞鍋四郎太出る。御料所桜井村庄屋由太郎、今治領大庄屋青野桜六、石丸弥左衛門、浦手改幸三郎暇乞に来る。当領主一柳因幡守殿より浦

奉行代官役兼森田五右衛門見舞使者に出る。贈物助解由へ羽綿三把、坂部、柴山、下河辺、青木へ同式把宛。秀藏同断。佐右衛門、文助、庄作へ同一把宛。佐助、善八へ中折紙三束宛。藤吉、文吉、兵助、文蔵、惣助へ中折紙二束宛被下。郡用掛飯尾五郎八執斗にて先払。助解由羽綿代金三步下役中四人秀藏羽綿代金式歩宛。佐右衛門、文助、庄作、羽綿、代金宅歩宛。左助、善八中折紙、銀式兩宛。藤吉、並、僕四人中折紙、銀式兩宛に成る。当領郡用掛久米政五郎、日野滝五郎、西条領郡奉行手付白石弥三兵衛、同浦奉行手付栗本三十郎、同領主之江村庄屋常右衛門、大町村庄屋龜右衛門、中野村庄屋新兵衛、多喜浜村藤田八之丞出る。御料所、桑村郡惣代庄屋高田村和三郎、中村東分庄屋利右衛門、河原津庄屋虎之助、松山領桑村郡大庄屋柳新六郎兵衛、大新田村庄屋七左衛門、岡布郡大庄屋野口佐市郎、願連寺庄屋与三左衛門、北田野村庄屋平左衛門出る。此日松山領郡奉行手付吉川助兵衛、浦奉行下役井手武左衛門、山瀬勇蔵、諸郡惣代大庄屋門田又六、杉田雄五郎、渡辺与一左衛門、須賀重蔵、徳本元蔵、杉野順蔵、諸用掛三好利平治、八木近右衛門、松本五郎三、大沢忠左衛門、窪出巖石衛門、田中音蔵、森本喜佐治、高山与兵衛、小笠原善左衛門、片山太蔵、郷心同六人暇乞に出る。

同二十七日 朝小雨。五ッ後止曇天。九ッ後今在家村出立。下河辺、青木、文助、佐助、昨日打終氷見村境より初、西条村、加茂川幅六町半渡、古川村

海辺堤迄測、九ッ半頃より雨終日降る。測量人は八ッ頃着。我等、坂部、柴山、稻生病氣、直に今在家村より西条城下へ行、止宿。本町掛屋亮平、別宿中町天満屋猪之吉、松山御預御料所宇摩郡上野村庄屋為八、同郡用掛真鍋四郎太、小松領郡用掛飯尾五郎八、日野滝五郎、今在家村宿。徳五郎来る。讃州丸龜領豊田郡中田井村庄屋為右衛門、同丸井村庄屋与市来る。浦奉行手付栗本三十郎、当領主より御贈物持参。浦奉行小川三郎左衛門、御領主より使者贈物、我等へ晒布式疋、秀藏同疋。佐右衛門、文助へ奉書紙一束宛。庄作、佐助、善八へ杉原紙二束宛。藤吉へ半紙式束被下之。領分付添庄屋新兵衛執斗にて先払に成。坂部、柴山、下河辺、青木へ奉書紙式束宛。右僕四人へ半紙式束宛被下之。是も同前先払。我等、代金式兩式歩、秀藏、代金宅兩宅歩、佐右衛門、文助、奉書紙代金三步宛。庄作、佐助、善八、杉原紙代金式歩宛。藤吉半紙代銀三兩、坂部、柴山、下河辺、青木、奉書紙代金宅兩宅歩宛。右僕四人半紙代銀三兩宛と成。此日氷見村大庄屋高橋茂左衛門、西条村庄屋喜三右衛門、氷見村庄屋甚三郎、光治宿新井浜村加賀屋彦三郎出る。此夜曇天。

同二十八日 朝曇天。同所逗留。止宿掛肝煎為藏、門平又七出る。今治領青野保弥六来る。当領世話人喜多川村庄屋直右衛門、宇高村庄屋六郎治、松神子庄屋和忠治出る。此夜曇天。請問測量。此日より文助病氣。

同二十九日 朝曇天。下河辺、青木、稻生、善八、昨日打止古川村海辺堤より初、喜多浜村を過て船屋村字立石迄測、九ッ後帰宿。(我等、坂部、柴山病氣。稻生出動) 讃州高松家中久米栄左衛門(菓子箱持参) 来向。

同晦日 朝より曇天。七ッ半後、下河辺、青木、稻生、佐助、西条城下出立。船屋村字立石より初、新居浜浦迄測。外に新居浜浦御代嶋一周を測、八ッ頃新居浜浦着。我等、坂部、柴山、文助病氣。朝五ッ前西条城下出立。乗船して直に新居浜浦へ越。止宿本陣彦三郎。別宿市郎兵衛。此日松山御預御料所元ノ手代佐治庄作、同郡用掛 真鍋良平、同役河端与市左衛門来る。船屋村庄屋藤治郎出る。明日止宿西条領 垣生村庄屋治右衛門来る。西条領船木組大庄屋鈴木政市郎、新居浜浦庄屋与治右衛門出る。高松領御所(高松領にては、庄屋を政所というよし。此度御用桑内庄屋) 松田換三郎、上野瀬平来る。当日測量村々西条領古川分庄屋常蔵、喜多浜分庄屋病氣に付、代朔日市村庄屋忠兵衛、氷易村庄屋病氣に付、代組強云右衛門出る。

駿河国須走村米山家日記

小林 正雄

伊能忠敬が第八次測量として、坂部真兵衛以下十八人の測量隊員を引き連れ、深川黒江町の自宅を後にしたのは、文化八年(一八一二)十一月二五日。この時、忠敬はすでに六七歳という高齢であった。

今回は九州方面の測量を目的としていたが、藤沢宿から東海道を離れ大山道を西に向った。東海道筋の測量は既に終り、大山富士参詣で賑を見せ信仰の道として知られる、大山道沿いの測量を残していたからである。足柄峠を越えると富士の裾野が展がる。それを横断するとそこに御師の村須走がある。測量隊は十二月四日に着いた。

この夜、測量隊は須走村名主米山久大夫家と組頭高村助大夫家に分宿している。この時の測量隊のことは「伊能忠敬第八次測量日記」(以下測量日記)に明らかである。が、米山久大夫豊昌も「米山久大夫豊昌日記」(以下日記)に書き留めている。この「日記」は測量隊受入側の視点から記している忠敬の地域史料であるが「日記」の有意性は今後の史料批判を待たなければならない。そのため測量隊に関連する部分の「日記」を紹介し、その感想を述べたい。

はじめに、「測量日記」十二月四日条は須走村につき「此辺より須走村辺、宝永年中富士山焼に田畑悉く亡地となる」と砂降惨事で荒廃した景観にふれ、かつ測量した村名、距離等に及んでいる。だが日程変更を知らせる先触れ記録はない。しかし、「日記」は同日条で測量隊到着予定三日が四日とあり、この様に立場による視点の相違が記事にあらわれている。また、「測量日記」同日条は「後手我等(忠敬)永井、門谷」等「先手坂部、今泉、保木」等で出発とあるが、「日記」

は坂部、今泉、門谷、助大夫方御宿と「今泉」の組分けが異なる。

ついで、測量隊に関する御用人馬、測量用荷物運搬人馬は御証文に基づき差出すことになっているが、実際はこれ以上の差出しを余儀なくしたようである。特に文化元年(一八〇四)九月、忠敬が幕臣に取り立てられると受け入れ藩は御証文以上の人馬を積極的に差出すようになった。このことは文化五年(一八〇八)の土佐藩士奥宮止樹の日記、文化九年(一八一二)薩摩藩の史料で立証される。この史料のように小田原藩においても、測量隊が通った村々は同様に協力し、かててくわえて小田原藩主大久保加賀守忠貞は測量隊に差出した人足の監督、道案内役として、代官瀬戸喜三太を毎日出役させている。「測量日記」十二月朔日条に「瀬戸喜三太日々案内」、「日記」十二月四日条「善大夫方へ小田原御代官瀬戸喜三太様御泊」とあるように、瀬戸代官は須走村で測量隊とともに宿泊している。表向きは測量隊の道案内であるが、むしろ監視役が主であったようである。受け入れ藩の測量隊に対する見方はほぼ同じで、詳細な「村方書上」の提出命令などから、測量にかこつけ藩情偵察に來たと見た。しかし幕府の役職を記述した『江戸幕府役職集成』によると、天文方の職掌は天文・曆術・洋書翻訳・測量・地誌であることがわかる。これにより、忠敬の「村方書上」提出命令はこの職務権限に基づくもので、測量隊を密偵と受け取ったのは受け入れ側の天文方についての理解不足といわざるをえない。

忠敬が幕臣に登用されると、測量隊は当然ながら幕府直属となる。これを契機に忠敬は幕府から「請書」提出を命ぜられ、同時に忠敬は隊員から九ヶ条からなる「起証文」を提出させている。この「起証文」には、飲食につき誓約文があるにもかかわらず、現実には挙母藩の接遇(『伊能忠敬研究』八号十六・二〇頁)の例の通り守られていない。一方、測量についてみると、「日記」十二月四日条(史料参照)に忠

敬と久大夫との会話の記述にある、距離や高さはすべて概数である。

「日記」十二月四日条（史料参照）に久大夫宅前で四時間にわたる星測記事がある。これは先触の「泊所にて夜分星測有之候につき、南北見晴らしの場所拾坪計り用意可有之候」に基づくもので、雨天を除き星測した「測量日記」の星測記事を受け入れ側から証明する史料である。

「日記」十二月五日条「雨天に付御逗留」とある。雨のため測量隊出立が遅れ須走村で二泊となった。このため須走村は測量隊十九人分の諸賄、人馬確保など予定外の負担が発生したことになる。

「日記」十二月六日条「今曉御出立、吉田御泊、助大夫、十大夫吉田迄参る」と記している。恐らく、久大夫初め村役人は小田原藩案内役代官瀬戸喜三太とともに、測量隊一行を駿河と甲斐の国境籠坂峠で見送ったことが伺える。御役目を無事に果し安堵した久大夫の心情が短かい「日記」の行間に滲み出ているようである。

かくして、「測量隊」は須走村を去った。その後のことは「日記」十二月十、十一、十二、十三日条（資料参照）に測量隊後仕末記事を断片的に残している。その一は小田原藩の測量隊が無事に測量を終了し出国したと、滞在中の経費報告である。ついで、その経費分担につき関係宿村間で寄合相談を重ねていたことである。しかし、その結果がどうなったか、「日記」は記録していない。

測量隊にかかった経費内訳は、人馬継立、宿泊、昼食賄、星測所設営などであることが「日記」から分かる。御証文に基づく人馬継立は宿駅方負担。これ以外はすべて御定賃銭の支払いを受けるが、宿泊賄人足費は先触れ通りで済ませる訳にいかないのが通例であり、不足分が何程であるか分からないが、村の公的費用として村入用となる。そして、これらは石高割か反別割で村民に賦課されるのである。この負担例は『伊能忠敬研究』九号「挙母藩鈴村家の記録（二）」に「御巡

見杯と違不残村入用相成候段申渡」（十九頁）と巡見使の場合は藩費とするが、測量隊は巡見使でないゆえ、村入用である旨申渡を受けている。この前例から小田原藩も同様に村入用の旨村方に申渡したことを裏付ける史料である。

ここで「日記」を残した、米山家と須走村にふれて見たい。米山久大夫豊昌は須走村名主兼御師である。宝暦七年（一七五七）に生れ、天明五年（一七八五）二八歳から嘉永元年（一八四八）九二歳で天寿を全うするまで「日記」を書き残している。実に、六三年に及ぶ米山家の記録である。須走村（現静岡県駿東郡小山町）は東富士登山口にある。立地は甲州・相州・駿州への交通の要衝で、公用の馬継や富士参詣で賑いを見せていた、信仰の集落御師の村であった。宝永元年（一七〇四）「一紙目録」は、家数七一軒、人数三七八人、馬四六疋とあり、田はなく畑十一町ばかりの村落にすぎなかった。そこに、宝永四年（一七〇七）富士山噴火砂降りの打撃を受け、砂に埋れた畑地の再開発は困難となった。以後、村民は今迄以上に富士参詣者を対象とした経営に傾斜して行くのである。名主で御師を兼ねている米山家は大申学（「測量日記」は「家号大猿屋」と称し、須走村最大手の御師である。関東近県は勿論全国的に参詣圈が拡がり各地に多くの手代を出張させていた。特に、江戸からの参詣者の中には大名である松平大膳大夫、同長門守、丹羽和泉守の代参者が同家に宿泊している。これは御師としての米山家の得意先は民衆のみならず武士階級も相手にしていたことを示している。以上の様に須走村は農業に基盤をおく近世村落ではなく、富士御師に依拠し成立していた特異な村落であった。最後に、「米山久大夫豊昌日記」をご提供いただき、なおかつ須走村米山家、富士御師につきご教示いただいた、畏友渡辺義秋氏に心よりお礼申し上げます。

史料

(表紙・横帳)

文化八 須走村
 年 日 記
 米山久大夫豊昌

(前略)

一、(霜月)二十七日、晴

朝御殿場より天文方御通行之御先触到来、
 下小林へ久大夫行

(中略)

一、二十九日、晴

夜天文方御先触到来

一、十二月朔日、晴

天文方、二日、竹之下御泊

三日、須走御泊

四日、吉田御泊

右之通御先触到来

一、二日、晴

甚大夫、善大夫竹之下へ行申候処、今晚竹
 之下御泊延申候

一、三日、晴

甚大夫、助大夫竹之下へ行、今晚竹之下御
 泊、夜御先触到来

一、四日、晴

天文方御泊、伊能勘解由様上下拾人、北久
 原御昼休にて久大夫方へ御宿、坂部貞兵衛

様・永井甚左衛門様・今泉又兵衛様、門谷
 清二郎様上下九人、須走御屋途中へ持出し
 候、助大夫方へ御宿

暮方より久大夫宅前ニおいて、四ツ時頃迄
 星測被成候、久大夫宅前南北縁居込候場所
 へ、石埋置申候、此場所より富士の高サ
 里、富士の真迄四里四丁、古人富士の高サ
 千五百丈と積り候得は、壹里程之高サト心
 得可申由、伊能様御咄被遊候、下総銚子海
 辺より富士迄四十九里、下野喜連川より三
 十五里、江戸より二十六里有之よし、御同
 人様、御咄被成候、善大夫方へ小田原御代
 官瀬戸喜三太様御泊

一、五日、雨

雨天ニ付御逗留、八ツ時頃晴ニ付、籠坂迄
 御改被成候、五日、源大夫殿帰ル

一、六日、晴

今晚御出立、吉田御泊、助大夫、十大夫吉
 田迄参ル

一、七日、晴

右兩人帰ル

(中略)

一、十日、晴

源大夫殿小田原へ、天文方御出立御届ニ参
 ル、御賄入用期中懸リ願兼役 □□□ 帰申
 候利大夫 □□□□

(中略)

一、二十一日、晴

甚大夫菲山へ出役、久大夫引請金当年切替

年ニ付、年賦ニ願伺候処、年賦ニは不相成
 旨被仰聞候、切替証文ハ御沙汰も無之候、
 米わり 二十二日天文方諸懸寄合申来候

一、二十二日、晴

茂大夫、源大夫天文方諸懸之義ニ付、六日
 市場会所出役

一、二十三日 雪少々、節分

右兩人帰ル、中筋にて金式両助合可申旨、
 古沢筋定助郷ハ今日勘定ニ付、立合不申候
 由、古沢役人中より会所へ沙汰有之候よし、
 仁杉より定使を以天文懸り助合之義ハ、御
 殿場も組合村之事ゆへ助合候間、此度ハ須
 走へ助合相成間敷旨申来候、此方よりハ今
 日ハ挨拶不致候、今日ハ定て六日市場へ其
 村御役人中出会可被成候間、右会所にて談
 しも、可有之と存候ニ付、先ッ今日ハ挨拶
 ニ及び不申候(以下略)

参考文献

- 大谷亮吉『伊能忠敬』
 佐久間達夫『新説 伊能忠敬』
 児島一仁『伊能忠敬』
 渡辺一郎『伊能測量隊まかり通る』
 『伊能忠敬書状』『千葉県史料』
 『伊能忠敬第八次測量日記』
 『伊能忠敬研究』第八・第九号
 笹間良彦『江戸幕府役職集成』

(こばやし まさお・近世史研究)

伊能図の衝撃

— ガイアからコスモスへ —

芳賀 啓

幕末とは、通例一八五三（嘉永六）年のペリー来航後を指すタームである。しかし伊能忠敬はその業績からすると幕末の人と言っている。すなわち、この小文の目的は、人物Ⅱ人格とその業績は一旦剥離させねばならないこと、そうしてその「業績」を島国のタコツボ偉人伝のなかから引出して、再度日本史と世界史の上に置きなおすべきである、という提案を行うことである。なぜならば「当時のヨーロッパの一流の地図に比べれば、いくつかの欠点もあるが、当時の米国の近代地図には何ら劣らず、アジアにおいては抜群のすぐれた地図であった」という総括の仕方には、日本人が近代以降今日まで、国外を意識した場合にとらざるを得なかった屈折したコンプレックスの反映をみざるをえないからである。さらに言えば、圧倒的な情報と資本の激流にさらされ、その基礎的な格の差にあらためて呆然としている現代日本にあって、「科学の発展」という正義への組込みや、「中高年の星」などといった生甲斐キャンペーンにみられるような、伊能忠敬とその業績の素朴な宣揚は、とどのつまりは精神的な「竹槍決戦」への道を用意したものに他ならないと思うからである。それを避けるためには、過剰な思い入れの夾雑物を排除し、歴史そのものを問う地点にその「業績」を置き直してみるしかない。

率直に言って、伊能図は異様であった。為政者としてはじめてその

全容を前にする者を、刮目させる力をもっていたのである。

*

*

織田武雄『地図の歴史—日本篇』（一九七四年）の目次をみると、人名に「図」を付して、ある種の地図群を指す名詞とされている例は二つしかない。それは「行基図」と「伊能図」である。この二つの図が地図の歴史上特筆に価する重要な位置を占めていることは論を俟たない。国際的な『地図史人名事典』の編纂が企画されたとして、日本から文句なく推戴できる項目は、まずこの行基と伊能忠敬の二人ということになる（もっとも、行基自身が地図作成者であったという確証はないのだが）。これらの図はともに日本図つまり日本全図である。しかし、その内容、表現方法はきわめて対照的なのである。

「行基図」は「行基式日本図」ともいい、古くから流通してきた地図である。現存する最古の図は九世紀に溯り、江戸時代初期までいくつかのヴァリエーションをもって描かれてきたし、一五世紀の中国や朝鮮の地図にも利用され、また近年まで絵画の図柄などになって親しまれてきた。その様式は「日本」の総体を「くに」（旧国郡里制の「国」）の集合体として描き出し、それに京（山城国）から全国に向かう五畿七道の線を通したもので、いわば串団子もしくは葡萄の房といった按配の略図である。はじめて印刷に付された日本全図（慶長版『拾芥集』の日本図。図1）もこの行基図であった。これを「日本図の祖型」と呼ぶことにしよう。伊能図は、日本図の祖型が表現していた国郡制を基盤とした国土観を破壊し、追放した嚆矢であった。建設者は破壊者であった。日本図の新たな建設者、伊能忠敬が追放したものに、地図史の上からもう少し立ち入ってみなければならない。

*

*

もちろんこの行基図と伊能図だけが日本全図だったわけではない。



図2 伊能図
(大日本沿海輿地全図〈小図〉文政4(1821)年)



図1 行基図
(大日本図 天正17(1589)年写『拾芥抄』)

周知のごとく、一七世紀末には石川流宣の華麗な日本図が、一八世紀末には長久保赤水の、より精細な日本全図が木版印刷に付されて民間に流布し、とくに後者は為政者の書庫筐底に秘されたままであった伊能図とは対照的に、幕末まで一般に重用され、日本地図史上、江戸時代後期の日本全図を代表するものとされたのである。総じてこれらは「国」の境を重視し、かつその国ごとに異なった彩色を加えてこれを強調している。そうしてこの手法はそもそも幕府図(幕府撰日本図)においておこなわれていたのである。さらにいえば、伊能図以前の「日本図」はたとえ色分けはなくとも、「国」の集合として列島を描く、あるいは列島を旧国境で分界したものが常態であった。このかぎりにおいて、「日本図の祖型」表現は何百年にもわたって踏襲されてきたのである。

*

*

『大日本沿海輿地全図』の名が示すように、伊能図の本領は、実は日本列島海岸線の描写の精確さにあった。したがってそれは対外的な国境図であると同時に、水深の記録こそないものの、精密な海図でもあったのである。逆に、測量路程以外の内陸部は描写が貧しく、空白の部分が目立つ。これは、為政者がいつの時代も必要としたであろう行政用全国地図とはおよそ性格を異にする、特殊な地図であることを意味する(伊能図の後にも、幕府は国絵図の作成を全国的に指示している)。そうして、旧国郡名は書き込まれているものの、その境界線は測路部分に断片的に記入されているに過ぎず、したがって決定的なことには、これまでの通例であった旧国別の色分けは消失し、黄を主体として山稜の緑と路線の朱に彩られた陸部と水部の藍とが鮮やかに対照をなしているだけなのである。つまり伊能図は全体として旧国郡制を地図の色彩と主界線の上から追放せしめ、日本列島を単体の陸部

のつらなりとしてきわめて鮮烈に表現したのである(図2)。そうした表現自体は、図の作製技術や目的から自ずと導き出されたもので、とくに意図せざる結果であつたろう。しかしこれは日本表象史における、文字通りの革命であつた。同時代人が、伊能図をはじめて目にしたときにうけたであろうインパクトは、この点に起因する。

「伊能図の衝撃」は、一八二九(文政二)年の高橋景保獄死とシーボルト国外追放という惨劇にまで及んだ。景保は忠敬の上司で、旧師にして上司であつた高橋至時の嗣子でもあり、忠敬の死後その地図を完成させた責任者であつた。全国測量にあたつて遺憾なく効力を發揮した中央権力の毒は、とどのつまりはその直接の使い手側に回帰したのである。余談になるが、伊能図の国外持ち出しが国禁に触れるなら、測量と称して江戸湾にいるイギリス軍艦に伊能図(小図)を与え、退去せしめた官僚は何故罪に問われなかったのか、あるいはそれほどどの地図が、何故地方大名家に写図として与えられたのか、という疑問が当然生じて不思議はない。これをいつの時代も同様な、高級官僚(キャリア)の外向きの及び腰と癒着、内向きの居丈高、という戯画の構図に解してしまつていいものかどうか、研究課題ではある。

*

*

さて、石川流宣や長久保赤水の図を代表とする民間作成日本地図は、国絵図の写しあるいはそれから作成された官撰日本図を原拠としていた。国絵図は、正保元(一六四四)年、元禄九(一六九六)年、天保六(一八三五)伊能図完成から一四年後の三度にわたつて、幕府が全国の諸大名に命じて作成させたものであつたし、古くは大化改新の詔「国々の疆堺を觀、或は書し或は図し、持ち來つて示したてまつれ」(大化二一六四六年)の例をみてわかるように、伝統的国土図作成の手法は、それぞれの地域へ図の提出を命じる「下命型」だった。つ

まり旧時にあつては、通常、田畑・宅地・村落などの小域だけが直接測量で作製されるのであつて、国絵図や日本図を含む、今日我々が一般的に地図と考える一連の図の作製には、各地から図と情報を集約してつくりあげる「編集」以外に方法がなかったのである。可能な限り精確な部分図を接合して全体を仕上げるという方法は、理論的には有り得ても、往々にしてゆがみを拡大する。とりわけそのアウトライン(日本の場合には海岸線)は接合の角度をずらせば大失態に立ち至る(事実そのような官撰日本図が存在する)。伊能忠敬が測量途上綿密に行つていた緯度確認の「天測」は、このことを否定的前提とした方法原則にはかならなかつた。元來測量とは「測天量地」の略語で、天文觀測に重きのある術語であつた。今日の意味での測量には、むしろ「量地術」や「町見術」といったタームが使用され、それが狭小範圍を対象としたものであつたことを示している。

*

*

伊能忠敬が幕吏となつたのは、日本東半部沿海実測図を幕府に提出した結果であり、それはまさしく「伊能図の衝撃」の賜物だったのだ。彼はそもそも天文方暦局の役人として登用され、不朽の業績をあげることができたのである。蘭学の示すところ、地形の確認には天測に拠らねば精確を期し得ないことは明白となつた。測量という優れて地を這う所業は、土地の高低を記録する前に、その地点の平面(實際は球面)上の正確な位置を記さなければならぬが、これは結局のところはるか天空に視点を移動する、ということなのである。土地を精確に記録するには土地を離れなければならない。それはこの地表から凹凸を取去つて、理論数値上の地表面を設定することでもある。編集地図から実測地図へ、という地図作成史上の転軸点は世界的に確認できるだろう。言い換えれば、時代はガイア(地)が、ウラノス(天)とク

ロノス(時)の支配に服す、おおきな曲がり角に立ち至っていたのである。今日、地図と三角測量とはほぼ一セットになったような観があるが、三角測量とは、近世における地図づくりの基本作業が地表を離れようとする第一段階なのであった。オランダのスネリウスが、一六一五年に地球の大きさを知る目的で三角測量を試みたのは、そのことを雄弁に物語っている。伊能忠敬は三角関数は使ったものの、その測量方法は基本的に三角測量ではなく、旧来の「道線法」と「交會法」を精密にしたものにすぎなかった。また、「天測」による緯度確認の必要は、徳川吉宗の命を受けて日本全国を編集した数学者、建部賢弘が百年も前に主張していたことであつた。すなわち伊能図とは、技術論的にはプロト近代測量段階のものであり、過渡的性格を免れず、誤差・弱点・偏差も指摘される。しかし時代の切迫した要請が、旧来の編集図から飛躍した段階に位置させ、その表現を突出させることになったのである。なお、一三〇年間祖父父子四代にわたって三角測量をもちいた世界最初の地形図を完成(一八一八年。フランス全土一八二葉)させた、フランスのカッシニ一族については、別途触れる必要があるう。

*

*

ところで、「地図を差し出す」行為が支配に服属することを意味し、地図をもつことがその地を支配するに等しいのは、古今東西の文学や絵画が雄弁に語っているところでもある(司馬遷『史記』八六、荊軻の例)。しかし差し出す地図は、先に述べたように「地元」がつくることが当為と見なされていた。もっといえば中央権力の支配はひとめでも、自らの領域は可能な限り自前で始末をつける、封建自裁の原則が貫かれていたのである。

「御用」の旗が象徴するように、伊能忠敬は最新「科学」の技量成

果の要請と、対外的危機意識を背景とした幕府の権力を前面に押し立て、それまでの常態を破り、全国直接測量といういわば前代未聞の荒行をやったのでしたのである。旧慣からすれば、他人の屋敷に土足で踏み込むような、あるいは懐に手をつっこむような無作法と眉を顰められても見当外れとは言えない。「伊能図」は、幕藩体制の「ゆらぎ」の隙間に産まれ出て、それを食い破ることとなる鬼子のひとつであつた。「測量日記」をはじめとして、諸史料にとどめられた、伊能測量に対する地元の「無理解」の基本的構図はここにあるのである。

今日伊能忠敬を位置付けるとすれば、それまで人々の意識の常態として安定していた、地域(くに)の連結構造を破壊する最も基礎的な作業を敢行し、まもなく国民国家を支承することになる統一的な国土イメージ(図像)の原基を文字通り挺身確立した、その当為者としてなのである。

*

*

伊能図の完成(文政四一八二一年)から一七七年を経た今日、我々はもうひとつの「伊能図」を目にすることが出来る。それは、人工衛星からの地域画像である。ここに至って、その「地図」から国境線は完全に消失し、人間の痕跡はただ地表の砂漠化を拡大しているひとつの生物種の営みとしてしか存在しない。ガイアはウラノスを超えて、コスモスから眺められるものとなった。地図は、歩測や尋(ひろ)、尺やフィートといった身体スケールから発して、今やそれを幾乗倍かした巨大技術によって、システムとして配給されるものとなったのである。二〇世紀末端、地球規模の大競争時代において、我々がそこから衝撃を受けるとすれば、人間がガイア表面の生態系の幾割かを食い散らかしている生物の一種にすぎないことを視認するからなのである。

(はが ひらく・地図編集者)

伊能忠敬と数学

水野 滋

伊能忠敬が、その幼年時代・少年時代に、後の測量や天文学を学習する基礎となる学問を身に付けたろう事は、およそ想像がつく。

もちろんそれは、学問などと言う大袈裟なものではなくて、日常的に必要な「読み・書き・算盤」の程度であつたろうが、それらをどこで誰に学んだかについては、ハッキリしない。おそらく彼の父親である神保貞恒の影響が、相当にあつたであらうと想像される。

貞恒は小関の網元の娘に婿養子として入り三治郎忠敬をもうけているが、彼が四歳のときに妻と死別している。その後には養子縁組みが解消となり、忠敬一人を置いて、神保家に戻っているが、後に分家しており、そこでは私塾を開いていたと言う。

現在も貞恒が自分専用に木版で作させた野紙が残っていると言うから、当時ではかなりの教養人であつたと想像される。この貞恒の手元に、十歳から十七歳まで生活する間で、随分いろいろと知識を授けられた事だろう。

四歳から十歳まで残っていた小関家も比較的裕福な網元の家であり、家業の立場の上からも、読み・書き・算盤は教えられたと思う。商人の家では、いろいろな書類を読んだり、書いたりすることは必須であつたし、特に計算は不可欠な知識というよりも、技術であつた。子供に教える「読み・書き・算盤」程度のものなら近くの大人が教えることが出来たろう。

忠敬が十五歳の頃、土浦の医師の所で学んでいるが、その内容は

不明である。

多分、ややレベルの高い読み・書き・算盤であり、科学的な精神や発想のようなものの影響を受けたかもしれない。

問題は、精密測量や、天文学に必要な算数というよりも数学の知識であるが、この辺の事情について、当時の日本の数学について眺めてみたい。

日本の数学も天文・暦学と同じようにすべて中国大陸から帰化人や遣唐使によって伝えられ定着していったものである。中国の数学の歴史は古く、西暦前二〇〇年頃から纏められたと推定されている『九章算術』という本には、すでに面積や体積の計算法、比例、平方や平方根の求め方、連立一次方程式やピタゴラスの定理の応用などの問題と解法が書かれているという。この本には、方程、開平、開立、正負、分母、分子、約分、通分などという概念と用語が使われていた。

こうした知識が日本に於いて、どう使われたのかは定かではないが、奈良時代、平安時代の巨大構造物や、役人の租税の徴収などで使われたろう事は感じられる。

平安時代には「算の博士」という職があつたが、その役割については不明である。庶民レベルでの実用的な四則計算（加減乗除）は日本全国に浸透したが、十五世紀頃までは、この領域をやることもなく、更に発展させた独自の数学も発展しなかった。

日本人の書いた現存する数学書で、最も古いものは元和八年（一六二二）に刊行された『割算書』である。この書は京都の算盤塾の毛利重能（もうり しげよし）によって書かれた、算盤による計算方法であつた。当時の算盤は、現在で言えばコンピュータのようなものであつたろうから、算盤塾は当時の大変なハイテクロジー

の教室のようなモノであつたろう。この算盤は、既に中国から輸入されていたが、折から次第に拡大し、取り扱う物資や金銭も大きくなった各種の産業・流通活動と共に、便利な計算用具として普及し、国産化がなされいった。特に商人には必須の教養となった。

日本の数学に影響を与えたのは、元の時代の数学者朱世傑（しゅせいけつ）の書いた『算学啓蒙』（一二九九）で、これには先の『九章算術』の内容のほかに、天元術という方程式の立て方と解法が書いてあった。これが秀吉の朝鮮出兵の折に、朝鮮経由で日本に渡来し、後に日本独自に発達した『和算』の引き金となっていく。

さらに延宝四年（一五九二）に明の程大意（てい たいい）の『算法統宗』が持ち込まれ、決定的な影響を与えた。この書は、十六世紀の末辺りの、対明貿易の中で持ち込まれたと想像されるが、日本国内では多数のコピーが出回り、その内容が伝搬した。

この書では、算盤による四則計算だけでなく、平方や平方根や立方や立方根などの計算の仕方が書かれており、田畑などの土地の測量や、酒や醤油などの生産出荷量などを計算する必要のある者には、極めて実用的な書籍として普及したようである。

最初に日本で出版された本格的な数学書は、京都の人吉田光由（よしだ みつよし）の『塵劫記』（一六二七）である。『塵劫記』は、基本的には『算法統宗』の翻訳だが、日本人のニーズに合わせた書き方で、むしろ翻案といえる内容になっている。内容的にも、算盤による加減乗除の詳しい計算方法の説明から、度量衡、物の密度、両替の問題、比の問題、平面図形の面積、立体図形の体積、開平、開立や、初歩的な測量計算などについて、応用問題と計算方法などについて書かれている、極めて実用的な物であった。このため、この書は明治維新まで広く利用された。

『塵劫記』の功績は、日本にすっかりした「命数」を普及させたことであろう。まず、桁の大きくなる順に十、百、千、万、億、兆、京、垓、杼、穰、溝、澗、正、載、極、恒河砂、阿僧祇、那由他、不可思議、無量大数とし、桁の小さい順には、両、文、分、厘、毫、糸、忽、微、沙、塵、埃という風に命名した。これらは今なお使われている命数であり、何よりも全国的に統一された数字の概念が出来上がっていたので、ヨーロッパと異なり、混乱がなかったという。『塵劫記』は、その後も吉田光由だけでなく、いろいろの出版元から「統編」や「新編」という形で出版され、隠れたベストセラーとなつて算術・数学を学ぶ者のテキストとなった。

恐らく、佐原村の古くからの資産家であり、名家である伊能家には、『算法統宗』か『塵劫記』、とくに『塵劫記』のオリジナルかコピーは持っていたと思われるから、忠敬がこれらをテキストとして、独学で勉強することは出来たであろう。算術の基礎のある忠敬には容易にその内容を理解できたろうし実務の上で使用したに違いない。

『塵劫記』が版を重ね、塵劫記に基づく数学的な教養が全国に根付く頃、和算の天才といわれた関孝和（一六四〇頃～一七〇八）が誕生する。孝和は通称を新助、内山家から関家に養子となり、甲府藩主徳川綱重・綱豊の二代に仕える。一七〇四年、綱豊が將軍綱吉の養子に入った際に、幕府の御納戸組頭となる。

数学的才能の豊かな人で、一六七四年に『発微算法』を発表し、代数を用いて筆算で解く『点竄（てんざん）』を開発した。これを契機に和算は飛躍的な進歩を遂げる事になる。また彼は、円周率を十三桁まで計算したり、世界で初めて『行列式』の理論やベルヌーイ数を発見するなど、『算聖』の名をほしいままにした。

このように和算は関孝和によって、飛躍的な成長を遂げるが、そ

れ以前からも各地の好事家によって研究されていた。当時の数学は、儒学や漢學と異なり、いわば出世や金儲けの學問ではなかった。しかし、庶民やその道の専門家にとっては必要な教養の一つでもあったから、士農工商の身分を超越して数学を究めようとした人が居た。このため、数学的に難しい問題を解くことが出来れば、その榮譽を『算額』として、神社仏閣に掲げるような事が盛んに行われた。現存する算額は、およそ八〇〇面ほどあるが、その分布は全国に散らばり、身分も百姓、商人、漁民、職人など多様である。当時から和算の研究が、いかに全国的な規模で、いろいろな人の間で行われたかが判るが、それらは出世のためでなく、どちらかといえば趣味的な研究に近いものであったと伺える。

絵馬のような算額を神社仏閣に掲げたのは、難しい問題を解いた論文發表的な意味と、『どんなもんだ』とそれを誇示する意味と、さらに神仏に感謝するという意味も兼ねていたと思われる。

完全に保存状態の良い算額で、一番古いと思われるものは、京都の八坂神社の元禄四年（一六九一）の長谷川某という数学者のものだが、ここでは七〇次方程式を解いているという。つまり相当のレベルだったという事が判る。

また宮城県の塩竈神社には、四〇面もの算額があるというが、その土地柄から、恐らく近隣の農民・漁民であろう。

千葉県もかなり算額が発見されており、銚子や利根川流域の神社で発見されているから、これらも農民や漁民のものであろう。

数学を学ぶ同好の士のサロンの集まりもあったらしい。大阪の茨木市の総持寺に掲げられている算額で嘉永七年（一八五四）の物があり、複数の人名が記録されているが、その中の一つに、江戸の日本橋瀬戸内町という住所の入ったものがあったという。ここから、

好事家の間では江戸、大阪の住人が一緒になった数学研究会とか、同好会のようなものが開かれていたらしい。

これらから忠敬の頃は、和算の研究が相当に盛んで、各地に在郷の数学者が住んでおり、本業の片手間に研究もし、教える事もあったろうと想像させる。第一級を求めるのでなければ、何も大都會の江戸に出る必要も無く、比較的身近いところで、数学的な疑問を解いたり、学んだりする事は出来た筈である。

日本の数学、和算は中国の数学の知識をお手本として、このように各段の進歩と発展を遂げたが、残念な事に、趣味的な領域に止まり、ついぞ工業生産などの発達のために活用されることはなかった。水車の効率的な回転などの力学的な計算を数学を用いたり、反当り収量と肥料の關係とか投入人員などの關係を数学的に説明出来れば、和算はもっと別な発展を遂げられたろうと思う。

もっとも、政治的には厳しい封建社会で、資本主義もまだ芽吹いていない時代であったから、やむを得なかったのかもしれない。伊能忠敬などの一部の人が、天体の測量や土地の測量などで使用するのが、限界だったのかもしれない。

しかし、この和算の普及で見られた日本人の数学的な才能は、現代になっても、多くの数学者を生み、関連する理論物理学者や化学者、そして数多くの世界に誇る技術と技術者を生み出している事は忘れてならないと思う。

もっとも数学というのが、大掛かりな実験・実証を必要としない、紙と鉛筆で理論的に出来る、安上がりな貧乏人向きの學問だと言ってしまうえば、返す言葉もない。

（みずの しげる・経営技術研究会）

ニュース速報

日本にも伊能小図(本州中部)があった

●グリニッジ小図の一時里帰りが大きく報道されていますが、日本には無いといわれていた伊能小図の本州中部が都立中央図書館にあることが分かりました。北海道の会員高木崇世氏(近藤重蔵の研究)からお電話があり、ビックリして翌日調査しました。幕末の老中・阿部正弘が天文方に指示して作らせたものであるという大槻(如電力)氏の箱書きのある美麗な小図写本でした。詳細は次号で報告しますが、天測地点の記入もある(英国小図にはない)完成度の高い図でした。

(渡辺一郎)

●本誌連載中の佐久間達夫氏の測量日記が、出版されることになりましたので、第六次測量をもって本誌への掲載は終了とします。

『伊能忠敬測量日記』全六巻+別巻一(新説・伊能忠敬)

定価 七五、〇〇〇円+税

大空社 東京都北区赤羽二一六六 〇三―三九〇二―二九九八

五月中旬発行予定

入会案内

「伊能忠敬研究会」は次のような活動を行っています。

①本会報の発行 当面年四回。

②例会の開催 講演会、発表会、各種史料、伊能図の展示説明会、見学旅行などの例会。

③その他、伊能忠敬に関連するさまざまな事業。

入会方法

住所、氏名、職業、関心分野、電話、ファックス番号を通信欄に記

載の上、郵便振替にて年会費六千円を「郵便振替口座 〇〇一五〇・六・〇七二八六一〇 伊能忠敬研究会」あてにご送金下さい。

●伊能忠敬研究会・ホームページ 担当 大友正道

URLは、<http://www.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

*本誌の編集委員は次のとおりです(50音順)

安藤由紀子(元国会図書館憲政資料室)・伊能陽子(伊能家)・香取禧良(前佐原市教育委員会次長)・小島一仁(佐原市史編纂委員長)・齋藤仁(学習院女子短大)・佐久間達夫(元伊能記念館館長)・清水靖夫(立教高校教諭・法政大学講師)・芳賀啓(柏書房専務取締役編集長)・渡辺一郎(伊能日本図研究会代表・会社会長)

編集後記

●新緑の候、会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。

朝日新聞四月十日付朝刊十六・十七「よみがえる伊能忠敬」を皆様は御覧になりましたか? 正(精)確な地図海外で評価、資料に残る意外な素顔という見出しに心魅かれました。当日高輪プリンスホテルでは伊能イベントのオープニングパーティが盛大に催され、九〇名の会員の方々が出席されました。

●NHKテレビ「堂々日本史」―毎週火曜日夜十時―は、六月十六日、二三日に「伊能忠敬」を取り上げる予定とのこと。時代背景を含めた幕府側の視点から、忠敬さんはどんなタイプの人間に放映されるか興味津々です。

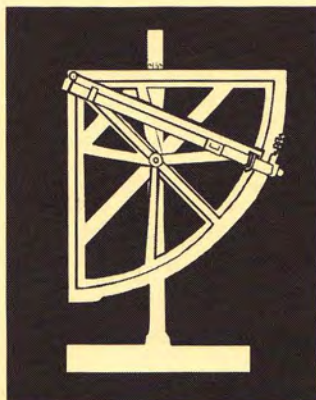
●忠敬さんは、一七七八年妻のミチさんを伴って奥州松島に旅行をしています。私も今夏、上杉鷹山の初入部の米沢への道―奥州街道を北上して米沢へ―を夫と歩いてきます。忠敬さんの第一次測量宿泊地に泊まる予定です。

(岡)

THE INO TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INO'S MAP AND WRITINGS

No.15 Spring 1998



ESSAYS

- Ino's footprints in ToyamaTAKEUCHI Makoto 1

TOPICS

- The National Diet LibrarySUZUKI Junko 2
Edo-Tokyo MuseumWATANABE Ichiro 5
Tomioka MuseumASAI Kyoko 6
Tokyo Citizens CollegeOKAYAMA Nobutaka 7

MATERIALS 1

Family Documents

- Onobu-sanANDO Yukiko 10
Minami HoemonINO Yoko 15

INO'S LAND SURVEY DIARY

- The Sixth Survey Diary (8)SAKUMA Tatsuo 19

MATERIALS 2

Regional Materials

- The Diary of Yoneyama Family in Subashiri VillageKOBAYASHI Masao 23

STUDY NOTES

History and Ino Tadataka

- The Impact of Ino's MapsHAGA Hiraku 26
Ino Tadataka and MathematicsMIZUNO Shigeru 30

Edited and Published
by
THE INO TADATAKA SOCIETY